
神堂司～世界を救う紅い瞳～（仮）

零崎 紫識 西尾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神堂司く世界を救う紅い瞳く（仮）

【Nコード】

N1394J

【作者名】

零崎 紫識 西尾

【あらすじ】

俺の名前は神堂 司15歳、今年から私立菅原高校に通っている高校1年生だった。

そんな俺が変なオヤジと出会い、そして気付けば知らない場所に・・・。

『超王道学園恋愛トリップファンタジー』ですが何か??

クドイ様ですが、あくまでも、王道を目指しています。

ああ、このパターンよくあるよくある的な小説をあくまでも目指しているので、誰が読んでもどこかひかれると思う所があったりする

ようないような：w w w

『ユニーク評価』10日で『2100人』突破！！

初めて10日でこの評価は凄く嬉しいです。

読者の皆さまありがとうございます。

『R-15』とか表示していますが、『大抵保険』ですから気にせず読んで下さい。

小学生には少し早いかな的な、小説になるかもしれませんが：w w w
今回、海外仲間？？の『鶏太郎氏』からこの題を頂きました。

しかし作者は何を思ったのか期間限定でする事にw w

作者は突拍子もない事をするのが好きなのか？？

P S ..このお話はフィクションです。

序章 「謎のおやじ現る」

「ここは、何処だ・・・暗く切なくするこの闇に覆われた場所は・・・。」

目が覚めて分ったのは俺が目になっているのは今までに見た事のない光景だった。

一面が闇に覆われていて、誰かの声が聞こえてきた。

『ツカサ・・・この・・・世界を・・・頼みましたよ・・・。』

！！？ 誰だ？？ でもどこか懐かしい声の様な・・・。

「！？ かあさん？」

俺は、そう感じた。

『・・・ツカサ、頼みましたよ。』

その声を最後に俺は意識を無くしてしまった。

俺の名前は神堂^{シンドウ} 司^{ツカサ} 15歳、今年から私立菅原高校に通っている高校1年生だ。

見た目は至って普通で、髪は黒、眼は茶色の普通の何処にでも居そうな高校生なのだが、かれこれ5時間前に俺は変な男にあった。

そいつはいきなり、上から降って来て、顔からおもいきり地面に突っ込んだ拳俺に鼻血を出しながら近づいてきた。

「神堂司君だね、君を我が校に引き取りに来たよ、ついて来て。」

「はぁ？？ おっさん誰？？ つか勝手に引張るな。っておい人の話を聞けって。」

とか抵抗してみたものの、おっさんは俺を話すどころか強引に引っ張って何処かに連れて行こうとする。

「話はあとだよ、今は時間がない、急がなければならないんだ。」

「・・・わかった、話は行ってから聞いてやろう。」

そう言うや否やおっさんは俺を引っ張って何処かの路地裏に連れてきた。

「少しここで止まって。」

おっさんは、何かの棒を取り出し呪文??みたいなものを唱え出した。

??何語ですか??

でも、何か聞いた事がある様な気がする、なんだか懐かしい言葉。

『TEZ?Φ?ΨΘΛM??λ?ε??O??κωΣΓΥρ
βεα・・・』

そんな風に思っていたら、目の前に光で出来た魔方陣??らしき物が現れた。

(はぁ??何かのゲームか??それとも夢か??)

とても正気では居られない事が目の前で起きていた。

俺は錯乱して取り乱した、がおっさんは冷静に俺の延髄に手刀を綺麗に打ち込み俺は気絶させられた。

そして気付けばこの闇の中にいた。

つか、おっさんどこ行ったんや。人の延髄に手刀当てやがって、今度会ったら延髄にハイキック喰らわせたる。

まああんなおっさんどうでもいいがここは何処なんだ??

つか俺が今居る場所に地面はあるのか??

なんだか変な浮遊感がするのだが・・・。

それにさっきの声、あの声は一体・・・。

!!?

何だ??光が見えてきた。

もう少しで出れるのか??

そう思っていると俺は光に飲み込まれて行った。

序章 「謎のおやじ現る」(後書き)

はじめまして、シオンです。

いや、とうとう小説に手を出しちゃいましたよ。

まあ最初は小手調べで、王道中の王道、とでもいいましようか、『学園恋愛トリップファンタジー系』ってどうなんですかね??

もう、勢いだけで書きますよ。

たぶん最初は説明ばかりで疲れるとは思いますが・・・。

結構長めの作品にしようと考えてはいるのですが、ハッピーエンドかノーマルエンドか迷っています。

まあハーレムもありかなと思ったりもしていますが・・・。

今のところ、予定は未定なので・・・WWW

乞うご期待と言う事で・・・

縁があったらまた会おう。

第1章 1話 『異世界』

そして気付けば辺り一面草原に囲まれていた。

はあ?? 何処だよここは??

意味不、てか、どうやって帰んだよ。

俺こんなところしらねえぞ。

まあどうでもいいけど腹減ったなあ。

とか思っていると目の前に一人の女性が現れた。

その女性は見ると美しく金髪のロングに何故かドレスと云ういかにも御嬢様のな感じの女性だった。

「貴方、誰?? ・・・と言うよりも貴方この世界の人間じゃないわね。」

「?? と言う意味だ?? つか俺には神堂司って言う名前があるんだ。貴方なんて呼ぶな。」

「シンドウ ツカサ、どこかで聞いたような・・・。まあいいわ、私の名前はマリー・J・シイナよ。よろしくね、ツカサ。」

「よろしく、シイナ。ところでこの世界の人間じゃないってどう言うこと??」

「ツカサ、貴方は魔法を信じる??」

「なんでそんなこと聞くの?? 信じないに決まってんじゃない。」

（そう、魔法なんてありえない、あれは夢だったんだ。）

そう信じていたと思ったのに、期待は大きく外れてしまった。

「そう、これを見ても??」

と言ってシイナは手を上に翳すとそこから小さい炎の塊、通商ゲームで言う所のファイヤーボールと呼べるものを作り出して、近くに立っていた大きな木の幹にぶつけた。

すると見る見る内にその大きな木は真っ黒焦げになってしまった。

「どう? これでもまだ信じない??」

そう言って彼女は無邪気に笑いかけてきた。

「これを見せられて信じないなんて言えないじゃないか。」
俺はもう諦めていた。

基居た世界に帰れるかは分からないけれど俺には本当の両親はいない昔から友達と呼べる奴も居なかったから前の世界に未練なんて無いのがまだ救いだな。

そんな事を思っていたら、彼女は驚いたようにこう言った。

「ツカサは、淋しくないのか？」

「少なくとも・・・寂しくはないね。今まで、一人で生きてきたから・・・。それに向こうのいい思い出なんて見当たらなしね。」

「そっか、じゃあとりあえず着いて来て、その服装じゃ目立つから、それに最近ではここ等へんも少し物騒になってきてるし・・・。」

「わかった。」

俺は来て間もなくして綺麗で美しい御嬢様と出会い、見知らぬ土地で一人残されるのも嫌なので着いて行く事にした。

しばらく歩くと目の前に大きな門が現れた。

（はっ???なんだこの門は??ドデカ過ぎだろ。つか壁高すぎてみえね・・・。）

「なんだ、この門と扉は、でか過ぎじゃないのか???と言うよりもなんで兵隊???」

「だからさつきも言ったでしょ???最近物騒になって来たって。とりあえず私に着いてきたら大丈夫だから、・・・ねっ。」

と言われ俺は渋々ついて行った。

壁沿いに歩いて行きいきなり止まった。

???

彼女は何か呪文を唱えているようだ。

すると壁に魔方陣が現れて穴が開いた。

ってええ~~~~~???

貴女はサプライズ好きですか???このセ○テープめ・・・。

「じゃあ行きましょう。」

「・・・ああ」

もう呆れて何も言えねーよ・・・。

そうして出た場所はどこかの庭だった。

良く見ると薔薇の様な花なんだけど色がおかしい・・・。

青いバラなんて初めて聞いたぞ。

「ねえ、この花何て言うの??」

「そのお花は『龍の涙《ブルー ティアーズ》』・・・私が最も好きな花よ。儂げだけど凜としている・・・私にはない力強さを感じるから。」

そう言った彼女の表情は悲しみに満ちていた。

第1章 1話 『異世界』（後書き）

小説で一番困る事…それは初めの第一歩…。

これが決まれば、書きやすくなるんだけれども…。

長いと鬱になるんだよね…。

まあ最初はこんなのが続く事も予想済みなんだけど、分った上で書かなきゃいけないのが正直辛い…。

まあ読者様も気長に読み続けて下さればと思います。

では、縁があればまた会おう…このちっぽけな僕の世界で…。

第1章 2話『そんなこんなで・・・。』

「さて、私の御家を御案内するわ。着いて来て・・・ってその前に服ね・・・。」

すると僕に魔方阵が現れて一瞬で服が変わった。

今まで着ていた服とは全く違う騎士の様な格好に変わっていた。

「なかなかいいわね・・・。」

??

「何だ?? この服は?? 何処かの騎士か??」

「いいえ、貴方は今日から私専属の執事として又、御学友として私と同じ学校に通いましょう。」

「でも、お金ないよ・・・。と言うかここに居座る話前提!!?」

「はい、お金は私が何とかしますわ。それに、ここに居座るのではありません。学校は来週始業式が始まるのですがそれまでに準備物を用意して、それと寮の手配をしなければ・・・。学校は残念ながら全寮制なので・・・。」

「そうなんだ、じゃあ気兼ねしなくて助かるよ。」

「でも、貴方の肩書はあくまでも私の執事なのですよ。ですから、私と同じ部屋で良いですね、ツカサ??」

「えっと・・・。それは本気で??」

「本気と書いてマジよ。」

・・・。

御譲様・・・そんな目で見ないでくれ・・・。断れないじゃないか・・・。

「分ったよ、それで手続きはどうするんだ??」

「とりあえず大丈夫よ、お金でものを言わせるから。」

って無邪気に物騒なこと言うよな、この御讓様は・・・。

「で、これから何処に行くの??」

「まずは貴方がどの魔法に属してるか調べに行くのと、魔力の強さを測りに行ってギルド登録しなきゃいけないの。」

「じゃあさっさと行こうぜ、日が暮れちまうよ。」

「そうね。まずは、魔法の属性を調べに行きましよう。ギルドに行ったらギルド証に属性と魔力が記されるようになるから、それによってランク分けされるのよ。」

「へえ。ちよつと面白そう。」

などと話しながらギルドに向かった。

第1章 2話『そんなこんなで・・・』 (後書き)

次回は『ギルド組織について』です。

第1章 3話『ギルド』

ギルドに着くとまず属性を調べに行った。

「ようこそギルドへ、・・・あらシイナちゃん、今日はどうしたの??」

「あつ、ジェシーお姉さん久しぶり、今日はギルドに友達を連れてきたの、来週から一緒に学園で生活するんだ。」

「へえ、はじめまして、シイナの伯母にあたる、ジェシー・Jミリオンよ。ジェシーって呼んでね。」

そう言った女性は凄く綺麗でシイナと互角、と言うよりもいい年になったシイナみたいだった。

ただ、胸はシイナの方が少し大きいけれど、まあ丁度いい大きさってところだろうか。

「よろしくお願いします。俺の名は神堂司です。ツカサって呼んでください。」

「分ったわ司君。司君はギルド始めて??」

「はい。」

「ここはね、魔獣や、悪党を退治するとお金を貰えて尚且つギルドランクも上げる事が出来るの。そして初心者の方は属性と魔力を調べる事が出来るとっても凄い所なのよ。」

「へえ、（だいたいさっきシイナに聞いたけどね・・・。）で今日は属性と魔力を調べてギルド証を発行してもらおう為に来たんだけど、まずは何処で調べるの??」

「あつ、そうなの。だったら右手の方に進んで突き当りを右に曲がって3番目の部屋よ。」

「そう、ありがとね、ジェシーお姉さん、行こう、シイナ、俺楽しみ。」

「そうね、じゃあまたね、ジェシーお姉さん。」

「2人ともまたね。お姉さん楽しみにして待ってるわよ。」
そう言われたので手を振りながら二人で言われた通りの部屋にやって来た。

「こんにちは、はじめまして、神堂司君だね。」

「はい、はじめまして、おじさんは誰?？」

「私の名前はジョイ・F・ケイフ、ジョイでも何でも好きに呼びたまえ、司君。」

(司この人はギルドの副マスターよ、このギルドの全てをマスターから任されているいわゆるナンバー2よ。)

(へえ、じゃあ強いんだね。)

(ええ、もちろん。)

「じゃあジョイさんで、で、早速なのですが測定の方お願いします。」

「うむ、じゃあこの水晶に手をかざしてくれ。これは属性を調べるための水晶じゃ。」

「へえ、これでいいのかな?？」

と言いながら手を翳した瞬間水晶玉が綺麗な光で輝き始めた。

「!?!? なんじゃこれは、こんな反応始めてみたぞい。」

「私も、水晶玉がこんなに光るなんて。」

そう言っているうちに光は納まり・・・。

見てみると、水晶玉は8色に渦巻いていた。

「!?!? こりゃたまげた。8色とな・・・。全属性なんて初めてじゃ・・・。」

「!?!? 全属性!?!? それって習ったら何でも覚えれるって事?？」

「そうじゃ、でもなんだかこの渦は少し可笑しいの、まだ何かが隠れていそうな気もするんじゃない。」

「えっ??!? まだ何かあるんですか?？」

「ああ、なんだかここの部分が少し可笑しいな反応を示して言うのじ

「やよ」

「あつ、本当、なんだか変な感じに屈折してる、でもなんでだろう??」

「おそらくお前さんは伝説の・・・『無』属性も兼ね備えておる様じゃ」

「『無』属性!! そんなのあり!!? 私でさえ、炎と風の二つなのに、全属性なんて酷い。」

「まあお前さんは見た感じこの辺りの者じゃなさそうじゃからかもしれないがの。」

「言いながらおじさんは又違う水晶を取り出した。

「ほれ、今度は魔力を凶るから、今度は魔力を練って手を翳してくれ。」

「魔力を練るのってどうすれば?」

「それは簡単じゃよ、ワシが今からお前さんの手に魔力を加える、それを感じて自分自身の魔力を探れば自然と見つかるよ」

「そっか、じゃあお願いします。」

「そう言うとおじさんは手を差し出してきた。

俺は言われた通り目を瞑って、魔力を感じるように集中した。

すると、俺の内の中で何だか温かい光が思ったような気がした。

「そのとたん!!!?」

「おお、なんと!!」

「えっ、そんなバカな!!?」

「そう水晶が割れてしまったのだ。」

「お前さんは初めて尽しじゃの・・・。とりあえずギルドランクはA+で文句ないじゃろう。まあお前さんなら楽にSSSランクになれそうじゃがの。じゃあ気をつけての、ギルド証はロビーでもらっとくれ。」

「わかりました、今日はありがとうございました。」
「そう言って二人で出てロビーにむかった。」

「でもツカサは凄いね、ってツカサ、目が・・・。」

「目?? 目がどうかしたの??」

「紅く染まってる。まさか、ツカサが紅眼だったとは……。てっ
ツカサ……。両目共だから……。魔力測り切れなかったのね……。」

シイナは納得と言わんばかりに満足そうな顔をした。

そんな彼女を見ていると守りたいと、思ってしまったんだ……。

「はい、司君、最初からA+なんて凄いじゃないの、頑張ってるね。」

「ありがとうございます。頑張って魔法を学びます。」

「それじゃあ、またその内きますわお姉さん」

「それじゃ、さよなら。」

「またね、シイナちゃん、司君。」

こうして俺達はギルドを後にした。

第1章 3話『ギルド』（後書き）

実は暇があるときに少し書きためたので、一気に更新しています
w w w

今日は、後、3話位はいけるかな???

仕事中に何やってんだか…。

まあそこは大人の事情と言う事で…。

皆さん年末忙しいかな???

ちなみに作者は休みなしです（涙）

第1章 4話『紅桜』

「次は何処に行くんだ??」

「そうね、授業に使う本や教材は学校側が用意してくれるから、後は魔術に使う媒介兼武器ね、それと後、目をどうするかね・・・。」

「目なら大丈夫だよ、カラコあるから。」

「カラコって何??」

「カラコはカラーコンタクトレンズの略式名称、ちなみにこんな奴。」

「言いながら俺は愛用のコンタクトレンズをとりだした。（ちなみに色はグレー）」

「どうやって使うの??」

「目に付けるだけ。簡単だろ??」

「言いながら俺は愛用のカラコを装着した。」

「痛くないの??」

「慣れれば平気だよ。」

「へえ。ツカサの住んだところは便利がいいのね。」

「でも魔法は使えないけどね。」

「魔法が使えないってどうして??」

「魔法の代わりに科学が発達したんだよ。」

「科学・・・って何??」

「科学とはこの世界にも木や土や水や火や鉱物って物があるよね? それを利用して人間の手で創っていくもの、また、公式で分同志を結合させて違う物に変える事が出来るのが科学かな?? 後は水や太陽の熱を利用して電気を造ったりかな。そして出来た電気を利用して発展したのが科学世界さ。」

「へえ、科学の世界って奥が深いのね・・・。」

「でも魔法の世界も奥が深いんじゃない?? だから似て非なるもの、

又は真逆の考え方になるのかな?？」

「へえ、科学世界か……。なんだか楽しそう。」

「まあ俺にとっちゃ、苦だったよ……。」

「……そう……。あつ、見えてきたよ。あそこが武器屋さんだよ。」

「へえ、じゃああそこまで競争だ、よーいドン!!」

「あつ、ずるい、まってよ。」

「ずるくて結構……。ははは。」

「まって。」

こうして俺達は武器屋まで無事に辿り着いた。

「いらっしやい。おつ、シイナちゃんじゃないか、珍しいな、どうしたんだ??この前買って行っただけじゃないか。」

「実は私の新しく入った執事も入学することになってそれで……。実はこの子魔法を見るのが初めてでそれでおじさんの所に来たの。」

「そうか、名前は何て言うんだ??」

「神堂司です。よろしくお願いします。」

「司か。よしわかった。じゃあ着いてきな。司にあった媒介を見てやろう。」

「はい、お願いします。」

そしておじさんは後ろのドアを開けてこっちに来いとうながしてきたので素直に従った。

ドアの向こうには階段があった、多分地下室に繋がっているのだと思う。

長い階段を抜けるとそこには色々な物が置いてある地下室についた。「ここには何でも置いてある、多分この世界でも一番の防具やだ。」

まずは司君、君の魔導に反応する物を探すんだ。」

「どうやってですか?? と言うか魔導って何ですか??」

「魔導とは魔法を使う時に使う体の中にあるエネルギーの事じゃ。それを外に放出するよう思い浮かべれば自然と反応を起こすようになるよ。」

「へえ、じゃあ・・・。」

俺は目を瞑って先ほど感じた魔導を言われた通り外に出すイメージで放出した。

「何と・・・。大したものじゃ・・・。」

「凄い・・・。」

「どうしたの?? って何だこれ??」

「これはファイヤードラゴン、ブリザードドラゴン、サンダードラゴン、アースドラゴン、スチールドラゴン、ウィングドラゴンの牙と鱗にダークドラゴンとホーリードラゴンの血じゃないか。」

「それって凄いのか??」

「凄いわよ、なんとって世界のドラゴン大集合みたいなものじゃないの。」

「へえ、でこれをどうするんだ??」

「これをお前さんの魔導とそれから鉱物とを組み合わせる魔法の媒体を創るんじゃない。イメージが形になるからの。これが大変なんじゃ創るのに1週間かかる奴もおるからの。」

「へっ、へえ。1週間・・・。(そんなにかかるのかよ!!)」

「まあ、私は10分程度でしたのにそんなにかかる方もいらっしやるのですか。」

「えっ、そんなに早く出来るのかよ。」

「まあ、人それぞれじゃ。まあとにかくやってみなさい。じゃが、こいつに耐えられる鉱物と言ったらオリハルコン位じゃの・・・。確かこの辺りにあったような・・・。」

「オリハルコン・・・って何??」

「オリハルコンは世界で一番強度が高いと言われている鉱物ですわ。でもこの鉱物はモンスターの体の一部だと言われていますの。だから鉱物とも言い難いのですわ。」

「へえ・・・オリハルコンか・・・。ちなみに高いの??」

「ええ、普通に家が建つ位かしら??」

（普通に家が建つ位ってどん位だよ。）

「へっ・・・へえ・・・。」

「おお、あったぞ、これじゃこれじゃ、さあ早速始めてみなさい。わしは今から店の方に戻っておくからの。」

「分かりました、出来たら真っ先に見せますね。」

「ありがとうございます。」

そう言っておじさんは店の方に戻って行った。

「でもイメージしながら魔導を送り込むか・・・。なんだか難しそうだな・・・。」

「大丈夫よ、私でも出来たんだから、きつとうまくいくわ。」

「だといいけど・・・。じゃあいくよ。」

そう言っただけはまず獲物のイメージをした。

何にしようか迷ったけれどやはり日本人魂（??）には逆らえず、刀をイメージした。

そして今度は魔導をイメージ通りに形にしてそれぞれの媒体をとらえながらイメージを膨らませて行った。

「わあ、すっ凄い・・・。」

「へっ??」

見てみるとそこにはひと振りの刀が出来ていた。しかもカラフルな・・・。

「また、派手になったなあ……。まあいつか。」

「じゃあ、名前を付けなければね……。」

「名前か……。刃が紅いから紅桜べにざくらがいいな。どうかな?？」

そう言った途端紅桜が金色に光った。

「へっ?？」

「嘘、何これ……。」

紅桜は光りながら鞆と鐙が付いた。

「へえ……。紅桜か……。気に入ったよ。」

「凄過ぎて頭が着いて行かない……。とりあえず、おじさんに見せに行こう。」

「そうだな。」

俺達は元来た階段を上がって店先に出た。

「おっ、もう出来たのか。早かったじゃないか。」

「はい、紅桜って言います。」

「紅桜か……。いい名じゃ。ところでそれは剣か?？」

「いえ、刀って言います。」

「カタナか……。頑張って使いこなせよ。」

「はい。ありがとうございます。」

「それじゃあおじさま、またね。」

「それじゃ。」

「またこいよ。」

こうして俺達はシイナの家に戻った。

第1章 4話『紅桜』（後書き）

名刀『紅桜』…。

ちなみにこの紅桜には特殊能力があります。

ハッキリ言ってこれは、反則的な代物になりそうです…。

それから最後に鞘と鐔が現れたのは一種の封印と制御装置的な役割と後は秘密にしておきましょう。

第1章 5話『異世界での初日の終わり』

家に着くと、メイドさんが立っていた。

「シイナあれ誰だ??」

「あれは、メイドさんのキャサリンですわ。」

「へえ、凄く綺麗な人だけど取っ付き難そうだね……。」

「無表情ですが慣れれば一寸した変化に気付きますわ。」

「へえ、はじめまして、キャサリンさん、僕は神堂司です。新しく御譲様の執事として雇われました。よろしく願います。」

「はい。私はキャサリン・K・キヨミです。こちらこそよろしく願います。」

と無愛相に返事を返してきた。

「キャサリンさんいつも御苦労さま。」

「はい、御譲様、ところで司さんはどちらにお住まいになれるのですか??」

「私の部屋の隣よ。護衛も兼ねてるから……。」

「そうですか、ではそのように手配します。」

「ありがとう。じゃあ夕食になったら呼んで下さいね。」

「かしこまりました、シイナ御譲様。」

「それじゃ、キャサリンさん。」

「はい、司さん頑張って下さいね。」

「ありがとう、キャサリンさん、じゃあね。」

そうして、俺達は屋敷の中に入って行った。

……何処に向かっているのだろう……??
その様に思っていると、

「ついたわよ。」

???

「ここどこ?？」

「ここが今日から貴方の部屋よ。まあ5日もすれば学園の寮になるけれどね。」

「ふうりん、ありがとう。着替えとかあるかな?？」

「その点はばっちりよ。保証するわ。なんと言ってもセバス（長年マリー家に仕えている執事長）に言っておいたから。」

「なら安心だね。」

「ええ、ところで明日はどうしましょう。」

「じゃあ町を案内してよ、あつても・・・魔法も少しは学びたいし・・・。とりあえず常識を教えてほしいな。」

「分ったわ、明日は早いからご飯を食べて御風呂に入ったら今日はもう寝ましょう。」

「了解。」

こうして俺はここ、マリー家でお世話になることにした。

まだまだ分らないことだらけでしかも今まで過ごしてきた世界とは全く異なる世界に対しての不安と希望を入り乱れさせながら…。

第1章 5話『異世界での初日の終わり』（後書き）

今日はここまで…。

にしようかなとも思っただのですが折角なのでこのままドンドン進めます。

今凄い創作意欲がわいているっばいので… W W W

第1章 6話『平和な朝』

「ツカサ・・・おき・・・って・・・ツカサ!!」

「んん!？」

「おはようツカサ。」

「シイナ・・・おはよう。」

「もう朝食の準備が出来てるので早く顔を洗って大広間まで来て下さいね。お父様もお母様もお待ちですよ。」

「・・・ちよつと待て、今何て言った。」

「だからお父様もお母様也大広間で待つてると言ったのですわ。」
「なあゝにいゝゝ。やっちゃまったな。男は黙って従う、男は黙って従う。それは完全に奴隷・・・的な感じ。」

「何を朝からやってるの?? 早く支度して下さいな。」

「わかった。」

俺は急いでシャツを脱いで着替え始めた。

「きやゝゝ。」

「今度は何だ??」

「いきなり着替えないで下さい。」

「早く支度してって言ったの誰だよ。」

こんな感じで朝から醜態を晒してしまった。

(複雑な心境・・・。はあ・・・。)

そんなこんなで俺は急いで支度して大広間に向かった。
大広間は入口のドアがとてもデカイ。

心の準備がまだなのにドアは無情にも開いてしまった。

「さあツカサ、こっちよ。私の隣に座って。」

「わかった。」

俺は言われるがままにシイナの隣に座った。

「おはようツカサ君昨日はよく眠れたかしら??」

「おはようございます。マリー奥様、それはもうぐっすりとおかげで疲れも取れました。」

「そう、それなら良かったわ。でもツカサ君、私の事はこれからお母さんって呼びなさい。：昔から息子が欲しかったのよ。」

「えっ、でも・・・。」

「気にしないでいいのよ。なんだったらお姉さんでも・・・。」

「ちよっとお母さん、何血迷った事を言ってるのかしら。そんなの絶対に許さないんだからね、ツカサは私だけのものなんだから。」
何だ??今何かサラリと凄いい言葉が出てきたような・・・。

「朝から騒がしいぞお前たち、ツカサ君が困っているではないか、ツカサ君ワシもお父さんって呼んでくれていいんじゃないよ、昔から息子が・・・。(以下略)」

「そうよ、ツカサ君、君は昨日から私達の息子同然なんだからね。」

「わかりました。父さん、母さん。」

『貴方(お前)、聞きましたか(聞いたか)??』

『ええ(ああ)、もちろん。』

『「父さん」「母さん」、だって(ですってよ)。』

「私、嬉しいわ。」

「ワシも嬉しいよ。ツカサ君がそのまま本当の息子になってくれたらもっと嬉しいんじゃないの。」

「ちよっとお父さん、茶化すのもいい加減にいして。ツカサ早くご飯食べて出かけましょう。」

「シイナ、わかったよ。」

『ツカサ、シイナ、ですって(だって)。』

『近頃の子は、早いのが(早いんですね)。』

こうして朝は過ぎて行った。

(思ったよりきつくなってよかった。)

でも俺は心の中で少しホッとしていたんだ・・・。

第1章 7話『魔術師』

朝食が終ると俺達はこの豪邸にある訓練場と言う場所に来ていた。何故かと聞かれればそれは魔法の知識を付けるためだ。

「ツカサ始めるわよ。まずは・・・初歩の初歩ファイヤーボールを創ってあの的に当てる事ね。これが出来ないとその世界では生きていけないわよ。」

「分った。じゃあまずは手本を見せてくれない??」

「OK、じゃあ良く見てなさいよ。」

そう言っただけで彼女は呪文みたいなものを唱え始めた。

(やべえ・・・さっぱりわからねえ・・・。)

と思っただけで・・・

『司、司。』

(また、あの声だ。)

『司、貴方は知っていますはずですよ。この呪文を、文字を、意味を、思い出しなさい。貴方の存在理由を。そして、自覚しなさい。貴方がどうして科学世界にいたのかを・・・私の可愛い司、信じなさい、貴方自身の力を・・・』

そう聞こえて声は聞こえなくなった。

「ファイヤーボール。」

シイナはファイヤーボールを的に当てた。

「えへっへ。どうだった??」

「えっ、ああ、まあまあだな・・・。」

「まあまあって何よ・・・。」

「まあまあとはまあまあだよ。」

「じゃあツカサ、やってみなさいよ。」

「分った。」

「へっ?? 出来るの??」

「何か思い出してきた・・・。」

「思い出して来たってどう言うことよ。」

「まあまあ見てなっ。」

そう言って俺は詠唱なしでファイヤーボールを10個程創り出し、
的に当てた、しかも全部。

それを見たシイナは目を大きく開けて口をポカーンとだらしなく開
けたまま固まっていた。

「どうだ?? 凄いだろ??」

「凄い凄い凄い!! なんてどうして?? 違う世界で生まれたんじゃないの??」

「落ちつけよ、今から説明するから・・・。」

「うん、分かった、じゃあお茶でも飲みながら私の部屋で話しまし
よう。」

「ああ。」

こうしてシイナの部屋へ向かうことになった。

第1章 8話『司の魔法豆知識その1』

「で、あれはどう言うことよ、ツカサ。」

「実は話せば長くなるんだが、シイナは、昔魔王と戦った勇者の話知ってるか??」

「ええ確かそのお話では魔王は封印した事になってたわね。そして勇者の名前は・・・!?!」

「そう、神堂聖一、俺のじいちゃんだ。」

「!?!?嘘!?!?だってもう4000年も昔の事よ、ありえないわ。」

「普通ならね・・・。でも俺は生まれて5年で前の世界に飛ばされた。科学世界に、その時に異変が起きたんだな。たぶん時空干涉現象が起きたんだ。そのせいで未来に飛ばされちゃったのさ。だから俺は15歳なんだよ。」

「へえ。」

「その時に昔の記憶が全て飛んじまったのさ。」

「そうだったの。だから全属性・・・。」

「そう、じいちゃん譲りなんだ。」

「でも、どうして記憶が戻ったの??」

「それは、こっちの世界に飛んで来た時に母さんの声が聞こえたんだ。それで、さっき魔法を見てる時も声が聞こえて、それがキツカケで記憶が戻ったんだな。まあ5歳までだからそんなに魔法は使えんけどな。」

「へえ、でもどうして飛ばされたの??」

「それが、何か知らないけれど俺、命狙われてたんだわ。それで俺を科学世界に隠したわけよ。」

「へえ、でもどうして??」

「さっきも言っただろわからないって。」

「ふうん。じゃあツカサはどのくらいまで詠唱なしで魔法使える

の??」

「一応中級クラスまでは無詠唱で魔法は使える。でもそれ以上の魔法は学ぶ前に科学世界に飛ばされちゃったから出来ないがな。」

「すごい。中級クラスを無詠唱で、しかも5歳の時にはマスターしてるなんて。でもどうやったら複数の魔法を詠唱なしで出せるの??」

「強いて言えば、なれ、かな??うまく使えば初級の魔法でも最上級並みの力が発揮できるよ。」

「嘘!??」

「嘘は着かないよ。まあ使い方によるけどね。」

「どう言う事??」

「早い話が属性の愛相だよ。例えば火は水に弱いけれど木には強いみたいな感じだよ。でも、風は火を補う力がある。それを上手く使うと初級でも威力は10倍以上にもなる。言わば1+1=5にも10にもなるって事さ。こんな風にね。」

そう言って俺は手の中で小さな竜巻を作り出しそこに先ほどのフアイヤーボールを突っ込んだ。

すると火はたちまち燃え上がり炎の竜巻が出来あがった。

「どう??勉強になった??」

「ええ、とっても、魔法ってこんな使い道も出来るのね。少し驚いちゃった。」

「じゃあ今日はもうこの辺でおしまい。後は町を案内してくれるかな、御嬢様??」

「わかったわ。じゃあ着替えて行きましょう。」

こうして俺達は町に向かった。

第1章 9話『買い物、そして勉強…。』

町は思っていたよりも大きく色々な店があった。

俺達は二人で色々な店を見て回った。

アクセサリーショップでピアス（魔具）を買って、服屋さんで色々な服（主に学校で使う服）を買って、ジャンクフードを二人で食べながら色々見たりしていつの間にか日が暮れかかっていた。

「じゃあそろそろ帰ろうか。」

「ごめん、後一件だけ行きたい所があるんだけど……。ダメ??？」
ダメ元で聞いてみた。するとシイナは顔を真っ赤にして、

「そんな顔されたら断れないじゃない。で、何処に行きたいの??？」
と言ってくれた。

「本屋さん、色々知りたくて……。」「

「だったら内にある書齋に案内するわよ、本ならいっぱいあるから。」

「本当??？じゃあ早く帰ろう。今すぐ帰ろう。魔導書とか、上級魔法書とか、薬物書とか、禁書とか、後、歴史書も見たいな。」

「禁書はないけどほかの物ならだいたいあるわよ。」

「じゃあ早く帰ろう。」

「うん。」

こうして俺達は屋敷に帰って行った。

屋敷に着くとご飯をシイナと俺と義母さんと義父さんとシンディーさんの5人で食し俺はシイナに早く早くとせかしながら書齋に連れてきてもらった。

「ここが書齋よ。だいたい、数にして5000冊はあるから、好きなだけ読んで良いからね。」

「ありがとう、シイナ。じゃあ今日はこれと、これと、これにしとくよ。」

「そんなに読めるの??」

「なあくに、1冊1時間もあひや読みきれるだろう。」

「そう、じゃあ、明日の朝、キッチンと起きるように気を付けてね。」

「わかったよ。じゃあおやすみ。」

「おやすみ。」

そう言つて、俺達はここでわかれた。

そして俺はものすごいスピードで本を読みだした。

どれ位のペースかつて?? 1冊あたり10分かかるかからないか位の速さで読みだした。

こうして俺は今のこの魔法世界の知識と常識を身に付けた。

ちなみに今日読んだ本の数は・・・66冊だ。

その日から俺は学校が始まるまでご飯時以外は書齋にこもりつ放しで寝るのも忘れて読書に没頭した。

その結果、俺は寝不足で倒れてしまった。(そりゃそうだ。)

第1章 10話『いざ学園へ』

気付けば、俺は出発の日を迎えていた。

「ん??? 何だ???」

起きるとシイナが顔を涙で腫らした姿で俺の手を握ったまま眠りかけていた。

「おはようシイナ。」

俺はそんなシイナに感謝の意味を込めて握られた手にキスを落とした。

すると、シイナは『きゃー!!!』と叫びながら起き上った。

「起きてたのかよ。」

「今起きたのよ、それより2日も寝たままだったから心配したんだよ??? 大丈夫???」

「ああ、大丈夫だよ。一寸寝なさ過ぎて倒れただけだから。」

「きちんと寝なきゃ駄目だからね。で、本はどれ位呼んだの??」

「んん……。だいたい、2000冊かな??? あと半分位??」

「そんなに読んだの!!!? 体に悪いよ。」

「大丈夫だって、体だけは丈夫だから。」

そう言って俺は笑って見せた。

「倒れたくせに……。心配したんだからね。これから無理は絶対に駄目だからね。」

「分ったよ、シイナ。ところで学校にはどうやって行くんだ??」

「へっ??? ああ、転移魔法、と言いたいけれど転移魔法禁止だから、歩いて電車に乗って行くわよ。学園専用の電車があるの。」

「そうなんだ。だったら早速出発だね。って荷物用意してない……。」「」

「しておいたわよ。ツカサ寝込んだから……。ほらこれ見て。」
そう言ってシイナは俺に荷物を渡してきた。

「ありがとう、シイナ。」

「じゃあ下に行ってご飯食べよう。お父さんもお母さんも心配してたわよ。」

「そうだな、行く前に元気にご飯食べたなら心配なく学校に行けるな。」

そう言いながら、俺達は、大広間に行った。

「おはようツカサ君、心配したんだからね、無茶しちゃだめよ。」

「おはよう、父さん、母さん、心配かけてごめん。ちよつと本を読む事に夢中になっちゃって。ごめんなさい。」

「まあ男の子は心配かけてナンボだからな、わっはっはっはっは。」

「それよりおなかすいたでしょう。門出の祝いに沢山作ったの。ちよつと作りすぎたかしら・・・。」

「大丈夫だよ、母さんの料理はとてもおいしいから。」

そう言って手近にあった皿を取りがつつ食い始めた。

「おいしいよ、母さん。ありがとう、父さんも。」

俺は改めて2人に礼を言った。

二人とも照れくさそうに笑ってくれたので俺はシイナと二人で堂々と行けると思った。

まだまだ先は長いけど頑張って恩を返そうと決意した。

「じゃあ父さん、母さん、ありがとう。行ってきます。」

「じゃあね、お父さん、お母さん、心配しなくても大丈夫だからね。行ってきます。」

「気を付けて行けよ。手紙送るからな。」

「2人とも忘れ物はない??」

「ありがとう。」

「ないと思うわ。」

「そう、じゃあ。」

『行ってらっしゃい。』

『行ってきます。』

俺達は二人で町にある駅へと歩いて行った。

第1章 11話『車内にて1』

駅に着くと色々な人で溢れ返っていた。

「凄い人だね。魔法学校の入学式もあるからいつもより多いね・・・」

「うん、逸れない様に手繋いでもいい??」

「いいよ、放さないでね。」

そんなやり取りをしながら、目的の電車を探していた。

「あつ、あれだよ、ツカサ、学園専用列車。」

「へえ。ちなみにあれは何を元力として動いているんだい??」

「ああ、あれはね小さなクリスタルを媒介に魔法で動いているんだよ。」

「へえ、魔法原理の応用か。」

「そう、よく知ってるわね。」

「昨日読んだからな。」

「どこまで読んだの??」

「空間魔法までかな??」

「空間魔法使えるの!??」

「使おうと思えば、原理は分かっているから後は実践してみないとわからないかな。」

「凄い、あんな難しい原理をいとも簡単に読破するなんて・・・」

「そうかな・・・。結構楽しかったなあ。って列車の時間大丈夫??」

「忘れてた。急ごう、ツカサ。」

「了解。」

俺達はあわてて列車に飛乗り、空いている部屋を探した。10分ほどして空いている席を見つけたのでそこに入った。

「はあ、この列車凄いな、浮いてるぞ。」

「当り前よ、風のクリスタルを使ってるんだから。ちなみにクリスタルは魔力の源みたいなものかな？魔法石よりも強力な魔力を放ち、その魔力は尽きる事がないと言われているわ。それをこの列車にも使用しているのね。」

「へえ。魔法って凄いな。めっちゃ便利がいいなあ。」

「そうでもないわよ。魔力を使う道具しかないと言う事は自分自身の魔力を使わなければならないし、その分体力も低下するのよ。」

「でも日々鍛錬してたら魔力も上がるって。」

「ツカサ位最初からあったらいいわよねえ。」

そんなやりとりをしていたら、いきなりドアが開いた。

何だ？？と思い、振り向くと、そこには一人の変な男が立っていた。

「誰だこいつ？？変な奴。」

そう言ったら男は口を開いた。

「ああシイナちゃん：僕のマイスイートハニー元気にしていたかい？？でもなぜそばに男が：、もしや：そんな：。」

男は一人妄想して意気消沈していた。

「恋人だなんて、ツカサどうしよう：。」

こっちもこっちで妄想していた：。

とりあえず、早く元に戻って欲しいと思いながら学校の教科書を読むことにした。

・・・。

そうこうしていると、シイナが戻ってきた・・・変な世界から。

「ツカサまた読んでの？あれ程無理は駄目って言ったのに。」

「無理はしてないよ、楽しんでるし、それにあっちの世界に一人で行っていたのはシイナだろ。」

「ごめん、つい：。」

「まあいいけど、で誰これ？？」

「ああ、ストーカーかな?？」

「そうか、じゃあとりあえず、魔法で外に運ぶか。」

「出来るの!?!？」

「ああ、多分……。久々だがな、まあ何事も挑戦だ。」

そう言っただけ俺は風の中級魔法にあたるフライを試してみた。

するとストーカーらしき男の体が勝手に浮きあがり、そのままどこかに飛んで行った。

まあどこかは分らんがな。

「凄ーい。本当に出来た。」

「俺を誰だと思ってるんだ。まったく。」

「惚れ……。ちやい……。そうだよ……。」

と言ったが俺には何を言ったか聞こえなかった。

第1章 12話『車内にて2』

そうこうしていると次の駅に着いた。

そこで変な奴がホームで暴れていたので軽く魔法で抑えこんだ。
どうやってかって??

それは土属性魔法『ドーム』を使ったのさ。

ドームは回りを固い土で囲みこみ本来は敵から身を守るために使う
代物なんだが今回は逆に敵に使うことで閉じ込める作戦にした。

しかも、3重にして…。

周りの奴らも少し発想的に出てこなかったのか驚いていた、
まあ、周りの目何か全く気にならないが、益々シイナがウツトリし
ている様に見える・・・。

そんなこんなで列車に乗って早30分、いきなり扉が開いた。

「あの、相部屋良いですか??」

と、一人の女の子が言ってきた。

「シイナ大丈夫か??」

「私はいいわよ。」

「そうか、ならいいよ。」

「ありがとう、もう一人連れがいるの、ちょっと待ってて。」

そう言って彼女は荷物を置いて何処かに行ってしまった。

「??どこかで見た様な気が・・・??」

「シイナ知り合い??」

「たぶん・・・。」

「お待たせ。」

「すまない、無理を言って。」

「いや、別に大したことじゃないさ。気にするな。」

「そうよ、遠慮せずに座って座って。」

と、シイナが少し他人行儀モードになっていた。

「じゃあ遠慮なく、俺の名前はフランク・P・カエイ。フランク家の長男だ。」

「私の名前はフランク・P・ジュリアよ。ちなみに私達は双子よ。」

「へえ、俺は神堂司、今はわけあって、マリー家のシイナ専属執事兼御学友って事になってる。」

「私はマリー・J・シイナよ、一応マリー家の長女よ、よろしくね。」

「ええ。マリー家って、あのマリー家!!?」

「ええ、あの、マリー家ですわ。」

「どうしたの??マリー家ってそんなに凄いの。」

「貴方、マリー家の執事をしていながらそんな事も知らないの。いい、マリー家はね、この国で一番のお金持ちで、魔法もとっても優れている一族なの。」

「へえ、凄いじゃないか、シイナ。」

「ありがとう。でも、貴方には負けるわ。」

「そんな事・・・あるか・・・。」

「そうそう、ただでさえ全属性なのに、魔法で敵う訳無いじゃない。」

「全属性!!?本当に全属性なの??」

「うん、俺の家族は代々全属性だよ。まあ、俺含めて5人しか確認してないけどな。」

「すごい、マリー家に全属性の奴、ってどんな組み合わせだよ。」

「本当よね、私たちじゃ到底敵わないわね。」

「でも、そんなこと言ってフランク家も名門中の名門じゃないの。」

「確か雷属性に特化した一族だったわよね。」

「ええそうよ。そして聖属性もね。」

「へえ、それぞれ特化してていいなあ・・・。俺は特化してる所こないし・・・。」

「どこがよ!!全属性中級魔法までなら詠唱破棄出来るくせに。あんたの場合は全属性特化してるのよ。」

『全属性に中級魔法の詠唱破棄!?!この年で?!化物か!?!』

「ほら、御覧なさい、化物扱いになったじゃない。いい、貴方は特別なのよ、その力を間違った方に使っちゃだめだかね。」

「わかったよ、シイナ。この世界で一番最初に出会って何にも知らない俺に手を差し伸べてくれた君を助けるためだけにこの力を使うよ。」

「やだ、ツカサ、そんな事言われたら恥ずかしいじゃないの。人が見てるわ。第一私と貴方は一家族なのですよ。そんなのダメですわ。」

「どうしてだい??僕は君を守ってはいけないのかい??」

「だって私達まだ子供なのよ、そんなの早すぎるわ。」

「はあ??シイナもしかして勘違いしてないか??」

「勘違い??そんなのしてないわよ。」

「いや、絶対にしてるね。あの言葉をプロポーズだと勘違いしてるね。」

「えっ、勘違いなの・・・。」

「そう、勘違い、あの言葉は、『学園生活で何があっても』って意味だよ。」

「ああ、そうだったの・・・。残念・・・。」

「ん??何か言った??」

「いいえ、別に、なんでもないわよ、ツカサのバカ。」

そう言っただけで彼女は膨れて知らん振りをした。

「仲がよろしいですね。」

「出会ってまだ1週間しかたってないけどね。」

「へえ・・・それまではどうやって過ごしていたのですか??」

「それまでは、普通に平和にのんびりとその日暮らして生活してたのさ。」

「へえ。じゃあその時に魔法を覚えたの??」

「いや、3歳の時までに、大体は学んだ。それで最近シイナの本を読んだらだいたい覚えた。」

「そんな大雑把な事で覚えられるものなの!？」

「ああ、もう慣れだな慣れ。基礎さえシッカリしていれば大丈夫だよ。」

「へえ・・・、凄いだねえ・・・。」

「そんな事ないよ、全部本の受け売りだけどね。まあ今は時空魔法に挑戦中だけどね。」

「時空魔法!!? もう凄過ぎて何にも言えないよ・・・。」

「あははは・・・。」

「ツカサの前じゃどんな人間でもちっぽけに見えるよねえ。」

「そうだなあ。俺達に勝ち目ないじゃん。」

などと言っていると先ほどのストーカーが現れた。

「シイナ僕のシイナ、どうしてなんだ、そんなにその男がいいのか、分ったよ僕がその男を消してあげるよ。」

などと言いつつストーカーとか言う男は俺に襲いかかって来た。俺はつい、

「きもいんじゃばけえ。」

と言って軽く、時空魔法を行使してみた。

いわゆる相手の体を自分の思った場所に転移させる転移魔法だ。

その結果、ストーカーはどこかに消えていった。

「さて、邪魔者は消えたし、読書でもしよう。」

そんな事を言いながら、

俺は手に持っている教科書をめくり始めた。

しかし前の二人はこう思っていた。

(司には逆らわない方がよさそうだ)と…。

第1章 12話『車内にて2』（後書き）

どうもシオンです。

なんだか話の内容がギャグ化してきていてどうにも…。

まあこれはこれでいいんですがねWWW
感想などあれば嬉しいです。

第1章 13話『学園寮』

そうこうしている間に学園についた。

ちなみにシイナの実家から列車で1時間もかからないようなところだから、頑張れば家から通えるが、全寮制の為それは出来ない。

王都のものは大半この学園を卒業している。

もちろん、王子や姫も例外ではない。

そしてこの学園はこの大陸の中で一番大きく、色々な場所から生徒がやってくる。

「うわぁ、結構でかいなぁ…。俺が通ってた学校の軽く3倍はありそうだな…。」

「そりゃそうよ。この大陸で一番大きな学園なんですから。」

「へえ、ところでこれからどうするんだ??」

「そりゃ、今から学園寮に行って、部屋へ荷物を置きに行くのよ。」

それから今日は学校の中を探検しよう。」

「それいいわねシイナ、じゃあまずは寮に行きましょうか。」

「おう。」

こうして俺たちはまず寮に向かった。

寮はとんでもなくて何棟もあった。

まず寮の中でも一番大きな棟のカウンターに向う事になった。

大体、そこが手続きの場所となっているらしい。

「こんにちは、今日からこちらでお世話になります、マリー・J・シイナです。部屋の番号を教えて下さいませんか??」

「はい、こんにちは、私はこの寮の管理をしている、メアリー・K・レインよ。御連れの方もかな??」

「はい、俺は神堂 司です。」

「私はフランク・P・ジュリアですわ。」

「俺はフランク・Pカエイだ。」

「分りました、少々お待ちになって。」

そういうと彼女は一冊の本を持ち、呪文を唱え始めた。

多分探査と言う魔法の一種だろう。

すると、その本は勝手にページがめくられていき、ある場所で止まった。

「はい、わかりました。シイナさんと司君は同じ部屋で、ここ第1棟の最上階の5003号室です。それから、フランク家の兄妹もこの棟の最上階で5006号室です。何かあればまた尋ねに来てください。」

「ありがとうございます、でわ失礼します。」

こうして無事に、部屋に辿り着いた。

部屋の鍵は特殊で、複製は絶対に不可能なものらしい。

それで鍵を開けて、部屋に入った。

部屋の中は広くリビング、キッチン、ダイニング、それとバスルームに御手洗い、ベッドルームが何故か、4つもあった。

「シイナ、なぜベッドルームが4つもあるんだ??」

「私も知らないけれど、友達を呼んでもいいんじゃないかしら??」

「へえ、まあいいや。それより、制服があるけど、これ少し小さいんだよねあ…。」

「まあ、ちよつと間違えたのかしら…。」

「集合前にロビーでかえてもらうかな。」

「そうね…、ところでツカサは料理って出来るの??」

「出来るけど?? あっ、でもこの世界の調味料とか食べ物わかんねえや…。シイナは出来るのか??」

「一応ね、何でも出来なきゃダメ、ってのが家の家訓みたいだし…。」

「じゃあ時間があるときは一緒につくってもいいな。」

「いいわね。じゃあとりあえず、ロビーでカエイ達を待ちましようか。」

「そうだね、じゃあひとまず、ロビーにでも行こうか。」

こうして制服を片手にロビーへと向かった。

第1章 14話『キャラ崩壊!?!』

ロビーに行くともまず受付で、制服に関して聞いてみたら、問題なかったのだが、サイズを測り直さなければならぬのでと言う事で測ってもらったことになった。

誰にと言われたら普通は、メアリーさんなのだろうが何故かシイナが測りたいと、言っただけで聞かなかった。それで済んだ。

そこで、近くの更衣室に行くことになった。

更衣室は人が4人入るか入れないか位のカーテンで仕切りをしてあるタイプのやつだ。

そこに二人で入った。

「じゃあまずはどうすればいいんだ??」

「どうすればって…測るんだから、服…脱ぎなさいよ。」

そう言ったシイナの顔は少し赤かった。

俺は言われるまま服脱ぎ下着姿（ボクパン一枚）になった。

少し恥ずかしいか思いながらシイナの方に向くと、シイナの顔が湯気が出るんじゃないかと思うほどに赤くなっていた。

「シイナ、脱いだけど…ってシイナどうした?? 顔が赤いが熱でもあるのか??」

俺はそう言いながらシイナの額に手を当てた。

熱はないようだが…。

「うん、熱はないな、大丈夫か?? 気持ち悪いとか??」

「そうじゃないくて…ツカサの体見て、少し恥ずかしくなったただだから、気にしないで。」

「そうか?? それならいいけど…、じゃあ測ってくれ。」

「分ったわ。」

シイナはメモリのついてある、紐状のもの（メジャーのようなもの）を俺の腰に回して測っては紙に書き、そして次に首回り、そしてお

尻、そして首からの長さ、腰骨からの長さ、そして股間からの長さを測り、紙に書きだした。

最後にと、頭の大きさを測るために背伸びをして一生懸命になって測ろうとしていたので俺は少し屈んで測りやすいようにした。

するとシイナの顔と俺の顔が10cmもないのではと思うほど近くなった。

シイナは頭を測るとこれで終わりと言わんばかりに俺の唇を去り際に奪っていった。

はい??今何が起ったんだ??シイナに頭を測ってもらって、それから…。

俺は混乱した。

「シイナ今のは…??」

「誤解しないでよね、別に好きでも嫌いでもないんだから。ただ、大人しくしてくれてたから…こんなの…ただの…ご褒美なんだからね。」

何このツンデレww

こんなキャラだったか??シイナ…。

まあ深く考えないでおこう、うん、そうしよう。

俺は深く考えることなく、そのままロビーに向かった。

第1章 15話『ダブルデート??? いいえただの買い物です。』

ロビーでマリーさんに紙を渡すと、夕方には出来ていると思うので取りに来て下さいと言われた。

そして無事にフランク兄妹と合流して学園を回ることになった。

「ここ、『キーリング学園』はこの大陸一の学園でね、色々なお店もあるし、それにギルドも一応あるのよ。」

「へえ、じゃあどこから行く??」

「まずはアクセサリーショップでしょ、その後は雑貨屋さんに行つて、そして後はそう言えばツカサの靴を買うの忘れていたわね。」

「靴か…。じゃあまずはどこに行きたい??」

『雑貨屋さん』

と…女性陣二人とも声はもってたよ。

「じゃあまずは雑貨屋さんに行きますか。」

「カエイ、どこに店あるかしらねえ??」

「多分あっちだろう、店などは向こう側にあると、先ほどロビーで待っている時に聞いたから、間違いないだろう。」

「じゃあ行くか。」

それから四人で店を目指して歩いて行った。

店がある場所は、色々な店でひしめきあい、男女問わず様々な人で一杯だった。

そこは昔の商店街の様な場所で、食べ物屋さんから、武器や、アクセサリーショップに、ギルド、それから何故か分らないが、宿屋まであった。

なんだか凄いな。

「何処かな、雑貨屋、ツカサ見つかった??」

「あれじゃないのか??」

俺が指したのは一軒のこじんまりとした一軒家だった。

「あそこはただの民家じゃないの??」

「シイナよく見て御覧、上に看板があるよ。」

そこにはキッチンと、看板があり、指輪の絵が書いてあった。

「じゃあまずはあそこに行ってみましょう。」

と言う事でそこに行くことになった。

店に入ると、中は西洋風のアンティークショップみたいでワクワクしてきた。

「シイナこれどうかな??」

俺は、目に付いた一品をシイナに見せた。

「ツカサこれいいわね。」

俺が見せたものは猫のヌイグルミだった。

その猫がものすごく可愛いトラ猫でシイナは一目見て気に入ったらしい。

他にもシイナとジュリアは色々買って次は靴屋さんに行くことになった。

靴屋さんでは色々な靴があり、体力が保つ靴とかスピードに特化した靴とか、様々な種類があった。

俺は色々見ていたけれどどれもぱっとせず、悩んでいた。するとシイナがやってきた。

「ツカサ、これはどうかな??」

そう言って手に持っていたのは、黒のブーツ。

しかしチェーンが掛かっていてとてもおしゃれな品物だった。

「うん、これいいかも。」

「じゃあこれにしよう。」

そう言うや否や店主のところに靴を持っていった。

第1章 15話『ダブルデート??? いいただの買い物です。』(後書き)

とりあえず今日はここまで…。

続きは明日のお楽しみ。

早く入学式にならないかなあ…。

でもなんか進まない…。

どんだけ一日の内容が濃いんだ。

まあそこは作者の作風と思って気長に待ってください。

昨日の夜はキャラ建てしてたんですがなかなかいいキャラが思い浮かばない。

そろそろストーカーの名前も決めてあげないとは思うのですがね…。

まあジョーイでほぼ確定なんですがね。

でも名前で呼ばれない不幸なキャラに仕立てようかなとか思っていたり。

後、実は寮の管理人さんは、ギルドの受付嬢の後輩設定にしたりとか、色々考えてます。

後は、本編では出てきてないのですが、実は、ツカサの育ての親は実の父母の生まれ変わりと言う設定だったりとか…。

まあ色々考えてます。

でも、そんなに濃くする気はありません。

だって、王道ですからww

第1章 16話『迷惑極まりない野郎共』

店を出てすぐになぜか人が避けて通っている場所が眼に入った。

そこに俺は何があるんだと思いカエイに「ごめん、ちょっと待って。」と言いつ残し行ってみることにした。

「ちょっと痛いから放してよ。私は急いでの。待ち合わせしてるんだから。」

「いいじゃねかよ、そんな奴ほつといて、俺達といい事しようぜ。」
「そうだ、これから気持ちいい事一緒にしようよ。俺結構自身あるんだぜ。」

「変態なんかと、一緒にいたくないの、だから放してよ。」
と言ういかにも自意識過剰な勘違い野郎が二人、結構可愛い目の女の子に言い寄っている。

と言うよりも、無理やりどこかに連れて行こうとしている。
俺はもちろん、この二人に対して喧嘩を売ることにした。

「おいおい、その勘違い野郎共、俺の連れに手出してんじゃねえよ。」

と言いつながら、彼女との間に入ってみた。

「じゃあお前も一緒に来いよ。」

と、殺気を出しながら威嚇してきた。

「いやだね、お前ら邪魔だからきえろ。」
と言いつてみたww

すると何処からともなくナイフを出して脅して来た。

「どうやら痛い目にあいたいらしいな。とりあえずついてこい。ここじゃ目に付くからな。」

(ふっ、どこの時代劇の悪役だよ、このハゲ。)

などと思いながら、とりあえず脅えて従っている“ふり”をしてついで行くことにした。

女の子は脅えながら俺の隣でリスの様についてきた。

どこに向かっているのかと思うと、狭い裏路地だった。

そこにはし意識過剰な勘違い野郎の仲間と思われるキモい野郎が5人いた。

（あわせて7人か、まあ死なない程度に捻りつぶすか。）

と思っていたと、野郎共が襲いかかってきた。

（ああ、やはりか。）

とか思っていると、女の子がへたり込んでいるのに気がついた。

なのでとっさに聖魔法と雷魔法を複合させて俺が創った結界（ツカサスペシャル仕様）を張り、俺は野郎共と対峙した。

まず、一人目はクロスカウンターで一撃で沈ませると、二人目三人目が同時に襲ってきたのでとりあえず、俺との間に土魔法の壁を出しそれに物凄いスピードでぶつかった為にあえなく撃沈、ならばと向こうも魔法を使おうとしてきたので面倒だから雷魔法のサンダーランス×4で狙い撃ち野郎共を打碎いた。

ちなみにここまで使った魔法は全て詠唱破棄である。

女の子の方を見ると、その傍には何処からか現れた野郎共の仲間と思わしき奴が結界に触れて伸びていた。

「馬鹿な奴だな、魔法の詠唱破棄できる時点で女の子の方にも何らかの魔法をかけている事に気付けよ。」

と言いながら俺は女の子の周りに張ってある結界を解きながら、歩み寄った。

「大丈夫?? 怪我はない??」

「: あっ、はっ、はい、大丈夫です、助けて下さりありがとうございます。」

と言いながら安心した様なでもまだ少し落ち着かない様な顔で俺を

見た。

「とりあえずどこか行こうか??ここじゃあまた変な奴が襲いかかって来るかもしれないし。それに俺も連れを待たせているからね。」

「分りました、とりあえずどこか落ち着くところでお礼も兼ねてその御連れの方と共に何か御馳走させて下さい。」

「分った、ところで…。」

俺はバツが悪い様な少し恥ずかしい様な顔でこう言った。

「俺はこの学園に来たのは今日が初めてで先ほどの場所が分らないのだが…案内してくれないか??」

女の子は少しキョトンとして満面の笑顔でこう返して来た。

「はい、分りました。私のナイト様。」

と…。

第1章 17話『姫様登場』

靴屋につくと三人共待ちかねたという顔で待っていた。

実際10分位しか経ってなかったのだが、女性陣にとってはあり得ないと言いたそうな雰囲気を出していた。

「ごめんごめん、待たせちゃったな、ちょっと女の子がガラの悪そうな男（生きる価値無い様な）二人に絡まれてて、助けに入ったら路地裏まで連れてかれて男達とその仲間（救いようのないバカ共）達の遊び相手（一方的な俺のイジメ）をしてたら遅くなった。」と副音声付で誤ってみた。

「もう、それならそうと言ってよね。」

「ツカサは優しいんだね。」

と女性陣は、許してくれた。

「はじめまして、私はケイト・R・シンディーって言います。先ほどはツカサ様に助けて頂き感謝しますわ。そこで、皆さんをお礼に何かごちそうさせて下さい。」

「ケイトってもしかして・・・豪族!!?」

「はい、私はこの国の第3王女です。」

「へえ、そうなんだ。」

「ちょっとツカサ、とんでもない人を助けたわね。」

「ああ、まあいいんじゃない??」

などと俺とシイナはアイコンタクトでこんな会話をした。冗談だ。

念話と言う初期の魔法を使っただけだ。

挨拶もそこそこでこんな質問が出た。

「ところでシンディーさんは何年生ですか?？」

シンディーの見た目は、20歳と言ってもいい位大人びて見えた。モデル並みのプロポーションで、胸もシイナより少し大きいかもしれない。

「今年から2年生になります。」

「じゃあやっぱり先輩なんですね。」

「俺達は今年入学予定ですから。」

「えっ?？でも、ツカサ君複合魔法使ってたわよね?？。」

「ツカサ…あんたそんな事も出来んの!!!?？」

「へえ、さすがツカサだな。」

とフランク兄妹が驚いたような、感じで反応した。

「まあ、ツカサだからね…。」

とシイナはもう慣れたと言わんばかりに素であっが…。

第1章 17話『姫様登場』（後書き）

どうも、シオンです。

皆様こんな俺の駄文を読んで下さりありがとうございます。

なかなか話が進まない上に、行きあたりばったり感がさいなまれる今日この頃…。

まあそこは初めてなので許してほしい…。

えっと最近日揮と言うものを書いています。

と言うより一種のブログか??

この小説に関する事とか、作者の環境とかまあ色々書いてます。

自由に読めますのでそちらの方も読んで下さいまし。

ではでは、縁があつたらまた会おう。

シオンでした。

第1章 18話『カフェ』

そんな会話をしながら目的地の、オープンカフェについた。

オープンカフェはそれぞれ食べ物と飲み物を注文して来るのを待ちながらこの学校の注意事項をシンディー先輩に聞いてみた。

「この学園で気をつけた方がいい事ってありますか?？」

「ええありますわ、まず先ほどの様な殿方とか、一部のガラの悪い人とか、後は、先生の中でも意地悪な方がいらっしやると聞いた事がありますわ。後は…豪族や貴族の方は、この学園では特別に見られますわ。ですから私も特別に見られてますわ…。本当は普通に接して欲しいのですが…。」

そう言ったシンディー先輩の顔は悲しそうであった。

「じゃあ俺達も特別扱いされるわけか…。」

「そうなるわね…。」

「もう慣れましたわ、私は。」

「皆大変なんだな。俺は多分ノーマークだろうな。」

「でも、シイナと一緒に生活してるんだろ?？絶対にねたまれるな。」

「えっ!？ツカサ様は、シイナさんと一緒に部屋なのですか?？」

「ああ、俺はシイナ執事と学友であり護衛でもあるからな。まあ半ば無理やりだ。」

「そんなことないわよ、無理やりだなんて人聞きの悪い言い方しないで。」

「じゃあ半強制??」

「半ば無理やりと何にも変わらないじゃない。」

「じゃあ強引に??」

「もういいわよ…ツカサのバカ。」

そう言ってシイナは拗ねてしまった。

少し悪い事をしてしまったと思いつながら先輩に話を振った。

「シンディー先輩は実戦とかした事ありますか??」

「ええあるわよ、1年生になって半年位したらギルドの仕事を手伝うって意味で、クエストを請け負うの、まあレベルはそれぞれに合わせるけど、まず1年生はせいぜいレベルの高い人でもCランク位まででしょうけれどね。ちなみに私はギルドランクはA-です。」

「ええ、シンディー先輩16歳でギルドランクA-なんですか…。
凄すぎます。」

「俺達なんかまだランクCだぜ…。」

「そうね、私もCよ。」

「へえ皆Cランクなんだ、でも私も入学したての時はCランクでしたよ。でもこれからの頑張り次第でランクは上がるわ、頑張ってね。」

『はい、頑張ります。』

「あら、ところでツカサ様は何ランクなのですか??」

「俺か??俺はランクA+だ。」

「ええ、明後日入学する奴がランクA+ってどうなんよ。」

「ツカサ君は凄い凄いのと思ってはたけどランクA+だったんだね。」

「でもそれ程凄かったら、普通は周りが騒ぐはず…なのに何でツカサ君の事が知られていないの??」

「ああ、それはギルドに行ったのが最近だからじゃないか??」

「えっ??どういう意味??」

「だからギルドで魔力とか属性を測ったのがつい最近になってからだからじゃないかと言ったんだが…何かおかしいな所があったか??」

「えっ、じゃあ初めてギルドランクを発行した時のランクは何ランクだったの??」

「だから、ランクA+だって…。」

『Aえ~~~~!!!!??』

どうやら俺は普通ではないらしい。

「どんだけやねん。はっ、思わず突っ込んでしもた。」

（カエイお前はどこの漫才師だ？？でもナイスリアクション。）
とカエイを心の中で称えた俺だった。

第1章 19話『帰りの方法…』

そんなこんなで俺達は夕方までカフェで寛ぎ俺とシイナはまだ買い物があるからと、皆と別れて市場に来た。

市場には色々な食材が売っており、魚、肉、卵、野菜、フルーツ、香辛料、ジュースはもちろんのこと、珍味や佃煮や酒も売っていた。そこで適当に買い物をして、とりあえず部屋に戻ることにになった。しかし、荷物が半端なく多くとても二人では持って帰れそうにない程の量を買ってしまった。

「どうしようか…。」

「本当よね、一度帰った方が良かったかしら。」

「まあ仕方ないか…。」

とか話しながらもって帰る方法を考えていて普通では考え付かない方法を思いついた。

「あっ、そう言えば俺、風魔法で物を浮かせるんだった。」

「その手があったわね。じゃあツカサ頼むわね。」

「了解。」

俺は詠唱破棄して風魔法のフライを使った。

すると物が宙に浮いた。

俺達はそのまま物を浮かせたまま歩いて帰ることにした。

しかし、この物を浮かせたまま帰ると言う行為、かなり目立つ。

回りの人達は俺達を見ては驚いているみたいだった。

(???なぜだろう???皆に見られているのは???)

そこで、シイナに聞いてみることにした。

「シイナ、何で俺達見られてるんだ??」

「何でだろう…???もしかして、あの浮かせてる奴のせいじゃない??」

「えっ、でもフライは中級魔法だから、練習したら風魔法の属性持つてる奴なら誰でも使えるんじゃないのか??」

「それにしてもその魔法の維持とコントロールもしないといけないでしょ。それを普通にやってるツカサに驚いてるんじゃないの??」

「そうなのかなあ?? 慣れれば簡単なんだけどなあ…。」

とりあえずあまり見られるのもいい気がしないので、少し足を速めて帰ることにした。

第1章 20話『二人だけの晩餐会』

部屋に着くと、持って帰って来た荷物を整理して、二人で料理をすることになった。

「何を食いたい??」

「今日は簡単なものでいいよ、疲れてるしね。」

「じゃあ簡単に肉焼いて、野菜ゆでて、後はご飯炊いて、スープでも作りましょうか。」

「そうだね、じゃあ御指導の程よろしくお願いします。」

「はい。」

こうして俺達は料理を開始した。

まずは下ごしらえからだ。

肉は軽く叩いて、その後包丁で少し指す、これは肉を軟らかくするためである。

その後、塩で味をつけて胡椒みたいなもので香りをつける。

野菜は水洗いしてから適当な大きさに切る。

そして鍋にお湯を沸かしそこに少し塩を入れる。

その中に野菜投入して火が通るまで茹でる。

肉は、火にかけてフライパンに油を敷いてから投入。

その間にスープ用の野菜を切っていく。

スープはトマト、イモ、キャベツなど、野菜が一杯入った、野菜スープだ。

それを塩で味をつけてハーブで香りをつけて煮込めば完成だ。

そうこうしているうちに、肉がいい感じで焼けたみたいなので、ひっくり返す。

うん、いい感じだ。

茹でた野菜を綺麗に盛り付けて、スープの味を見つめるといい感じ

だったのでそのまま弱火でコトコト煮込む。

肉は少しレアにしたいのでここで一気に火を強くして焦げ目をつける。

そして器に載せて、最後にソースを作る。

先程肉を焼いたフライパンの中に、葡萄酒を入れて、アルコールを一気に飛ばす。

その中に醤油みたいなものと砂糖を入れて、少し煮詰めた。

その煮詰めている間に、俺はスープの味を調べて器に入れた。

ご飯の方もあらかじめ炊いていたのでそれを盛る。

そして最後に肉の乗っている皿にソースを上からかけて完成だ。

こうして晩御飯が出来たわけだが…。

少し豪華になったか??

まあ気にしない方向で…。

こうして学園に来て初めての食事が完成したわけだが、シイナが少し驚いていた。

「どうしたのシイナ?? 早く座って食べようよ。じゃないと冷めちゃうよ。」

「うん、でもツカサってここまで料理が上手いとは思わなかったわ。」

「まあ科学世界と調味料が似てて助かったって感じだけだね。じゃあ頂きます。」

「頂きます。」

シイナは俺の作ったスープを飲んだ。

「美味しい、何これ、何を入れたの??」

「愛情??」

「プツ…まッ…真顔で…にやに言つてのよ。バツカじゃないの。」
と顔を赤く染めて言った。

と言うか嘔みすぎ、そして吹くなよ。

とか思いながら少し嬉しいと思っていた。

こうして、俺達は学園寮での初日を終わらせた。

第1章 20話『二人だけの晩餐会』（後書き）

どうもシオンです。

少し疲れてます…。

年末なのに休みがない…。

とりあえず休みがほしい。

切実です。

今回でようやく、初日が終わりました。

いやぁ長かった。

まぁ気にしない方向で。

ちなみに次回の話は、翌日ではなく、始業式で行こうかと考えています。

だって早くバトルしたいもんwww

では、明日も楽しみにしていてくださいな。

シオンより、読者様方に感謝を込めて。

第1章 21話『やはりこうなるか・・・』

次の日、俺は朝早くに眼が覚めたので少し探検しようと思い朝食を簡単に作り、シイナへの書置きを残して出かけた。

何処に行くのかって??

それは、図書館だ…。

でも図書館に向かう途中で気付いた。

……………

……………。

俺…

…場所…分らねえ…。

そんな困った状況に陥った俺の元に見知った人が反対側から歩いてきた。

「あらツカサさん、おはようございます。お早いですね。」

「あっ、シンディー先輩、おはようございます。先輩こそ早いですね、散歩ですか??」

「ええ、朝の散歩は気分がいいから。ツカサさんはどちらまで??」

「俺…実は…図書館に行きたかったんだけど…場所が分らない事に気がついて、どうしようかと悩んでたんですよ。」

「あらあら、それじゃあ私のご案内いたしますわ。昨日のお礼も兼ねて。」

「本当ですか??ありがとうございます。」

「じゃあ行きましょうか。」

こうして俺はシンディー先輩に図書館まで案内してもらう事になった。

図書室までは寮からそんなに離れておらず、歩いて15分位だった。ただ、その図書館自体が物凄くでかい事を除いて…だが。

何でもこの学園の内の図書館はこの大陸で一番の大きさで、本も100万冊を超えているらしい。

ちなみにその中には禁書の類も入っているらしい。

俺はそれを昨日の内にシイナに聞いていたのでぜひ行ってみようと思っていたのだ。

だからこうして俺は来た訳だがこれ位デカイと年中24時間開いているらしい。

さすがは大陸一と言ったところであろうか…。

俺はシンディー先輩についてと言わんばかりに、上級魔法が載っている本棚が何処にあるかを尋ねてみた。

「すみません、ついでと言っただけなんです、上級魔法の本棚ってどこか分りませんか??」

「ええ、それならこっちにありますわ。」

と先輩はおもむろに俺の手をひいて、まるで弟を連れて迷子にならない様になっている姉の様に俺を曳いて行った。

丁度本棚の真ん中の列の真ん中の本棚、そこら辺一体が上級魔法の本棚らしかった。

俺は適当に本をとると、パラパラと漫画を読むようにして読んでみた…。

内容は、風魔法の上級魔法の魔法の種類と術式などが事細かに記されていた。

まあそこまで難しくはなさそうな魔法であつた。

多分使おうと思えばイメージさえ出来れば難なく出来るだろうと思う位だ。

俺は先輩にもう一つ尋ねてみた。

「先輩、全部の属性の上級魔法の本集められます??」

「ええ、それなら問題ないわよ。でもツカサさんは勉強熱心なんです。上級魔法なんて、使える人はそんなにいないのに。」

「まあ覚えておく事に損な事はないですから。それに中級魔法は大概使えますので。」

「まあツカサさんはやっぱり凄い方なのですね。」

「そんな事ないですよ、じゃあ先輩お願いします。」

「分かりましたわ。じゃあ一寸お待ちになって。」

そう言って先輩は図書館の中央の本棚に向かった。

そして一冊の本を手にとって帰って来た。

「これがそうですわ、この本はこの大陸の上級魔法の全てが記されていますわ。ただ見たとおり、この様にこれ程分厚いので持ち運びが不便なのが欠点ですわ。」

「へえ、これ借りれますかね……?」

「ええ大丈夫ですわ。カウンターで受付をしたらすぐに借りれますわ。でもツカサさんはまだ入学してないので駄目ですね。じゃあ代わりに私の名義で借りてきますわ。少しお待ちになって。」

と、そう言ってカウンターに向かって先輩は歩いて行った。

こうして俺は上級魔法の本を今日一日を使い読む事で上級魔法を全てマスターしたと思う……。 (多分) ww

さて明日は入学式…何が彼らを待っているのか…。

第1章 21話『やはりこうなるか・・・』 (後書き)

どうも、シオンです。

もうすぐ年越しですね。

来年も頑張りますのでよろしくね。

では、シオンより愛を込めて。

よいお年を。

第1章 22話『後5：時間：ww』

『…カサ…ツカサ…ツカサ…ねえ…ツカサってば…。』
んん…誰だ…俺の眠りを妨げるのは…。

「まだ…眠い…。」

俺は寝ながらそんな言葉をつぶやいた。

「もう、始業式に遅れちゃうよ、ツカサ早く起きて。」
とユサユサと揺すられながらそんな声が聞こえて来た。

「…後…5…時間…。」

俺は寝ぼけながらそんな事を呟いた。

「そんなに経ったら始業式終わっちゃうわよ。ツカサ早く起きてて。」

俺は意地でも起きないという思いで、布団をかぶり、手でつかんだ。
「もうツカサ起きないんだったらこうしてやる。」

その瞬間何かが俺のお腹の上に凄い勢いで落ちて来た。

「グホッ！！？何だ何だ何が起きた！！？」

俺は慌てて布団から出てベットのの上を見た。

そこにあるのは昨日読んでいたあの上級魔法の本だった。

しかも何か3倍位の大きさになってるし…。

「おはよう、ツカサ、いい朝ね。」

「ああおはよう、シイナは朝から元気だな。」

「誰かさんのおかげでね…。」
と軽く睨まれた。

「で、これは何だ。」

と言い俺はベットのの上に乗っかっているあの『本』について聞いてみた。

「ああ、あれはね、初級魔法の初歩を使って物を大きくしただけよ。投げてる間に大きくすればあんな大きなものを持たなくても済むし。」

「へえ、じゃあ小さくも出来るんだ。」

「もちろん、ってツカサそんな魔法知らなかったの??」

「ああ、教えられた覚えはなかったな。」

「まあ明日には習うでしょう。結構簡単な魔法だから魔術師ならば誰でも使えるわよ。」

「へえ、まあいいや。じゃあ飯作って早く登校しようか。」
「そうね。」

こうして俺は急いで簡単な朝食（トースト、ベーコンエッグ、サラダに何化分らない果物のジュース）を作り二人で食べて急いで身支度をした。

「ツカサ、行くわよ。」

「おう、今行くよ。」

こうして俺は、新たな生活への出発をした。

第1章 22話『後5：時間：ww』（後書き）

どうも、シオンです。

次こそは始業式についての話になりそうですね…。

すみませんorz

昨日には作る予定でしたが、ここのところ忙しすぎて、まともに構成練れない始末…。

今日もこの文、5分で仕上げた始末…。

本当に申し訳ないです。

まあ明日こそはゆっくりしたいのですが、今一番忙しい時らしいので…。

まあ予想はしてたんですがね。

明日は始業式を書きあげようと頑張ります。

大体どうするかは決めてるので、後は名前だけです…。

でも…俺が一番悩み小説の中で一番時間を割くのが『名前』なんですよ。

魔法の名前、脇役キャラの名前、地名、色々ありますよね。

食べ物なんかは面倒なので、大まかな事しか書きませんがねwww
たまぁ〜にこの小説の中で、ツカサの御料理教室の話でも入れてもいいんじゃないかと思ったりもしますが…。

でも、結局は俺の中での時間稼ぎとして使いました（20話）、サ
ーセンorz

結構俺の豆知識なんかも入れたりしているので、ちょっと為になる話的な感じで思ってもらってもいいですwww

まあ活動報告も大概長いものになってるのでこの辺りで終わりにします。

では、新年頑張ってまいりましょう。

シオンより読者の皆様に感謝の気持ちと沢山のありがとうを…。

第1章 23話『始業式で・・・』

俺達は始業式があると言う大講堂に来ていた。

そこには在校生やら、新入生やら、職員やらでひしめきあい凄まじい喧騒であった。

回りを見ていると、突然後ろから声をかけられた。

「あら、ツカサ君にシイナちゃんじゃない。」

「あつ、シンディー先輩丁度よかった。」

「どうかしたの??」

「実はこの場所に来たのはいいんですが今からどうしたらいいのかサッパリ分らないので困ってたのですよ。」

「あらあら、それじゃあ一緒について来て、新入生はこっちのハズだから。」

「分かりました、助かります。」

「ありがとうございます、先輩。」

こうして俺達がシンディー先輩に連れられて、講堂の一番前の席まで連れてこられた。

「じゃあこの席に座ってて、もうすぐ始まると思うから。」

「分かりました。」

「先輩、サンキュ。」

「じゃあ頑張ってね。」

そう言って先輩は去って行った。

俺とシイナは黙ってたただ式が始まるのを待っていた。

すると突然回りが暗くなった。

『新入生の諸君、ここ、プレジデント学園に入学おめでとう。』

と言う声が頭に響いてきた。

多分初期魔法念話であろうと思う。

「さて諸君には今年度の入学を祝い今から式をしようと思うのだが、まずはこの学園の約束を伝えよう。それは、人を思いやる気持ちを忘れるな、である。これは近年魔物の凶暴化につれて、人間同士の喧嘩で死ぬ人が増えたからじゃ。それから、最近は魔王と手を組む様な人なども、現れおった。それにより我々人類は滅亡してしまうかもしれないと言われておる。なのでそう言う輩に対抗するために創られたのがこの学園じゃ。我々はこのプレジデント大陸の平和の為に在るべき存在なのじゃ。それを先ずは肝に据えてほしい。ワシからは以上じゃ。では入学式を始めるかのう。」

そう言うといきなり、目の前が明るくなった。

壇上には、一人の老人が立っていた。

「ではこれより入学式を行う。今年の入学生は501人だ。本来は500人だったのだが一人特例で入学生が現れたので1だけ増やしたためだ。では入学生を代表してマリー・J・シイナさんに、挨拶をしていただきます。では、シイナさんお願いします。」

「えっ、聞いてないよ…。」

「うわぁ、シイナ頑張れよ。」

「うう、行ってくる。」

そう言ってシイナはトボトボと歩いて行った。

壇上に立つとシイナは一生懸命、しかしどこか不安を交ぜ合せながらキチンとたどどしく、入学生代表としての決意と入学に対しての感謝の気持ちを総代とそして成し遂げた。

戻ってくるととても緊張していた事が窺える程であった。

「よかったよ。頑張ったねシイナ。」

俺は苦労様にそう称えた。

「ありがとう、でもとっても緊張したわ。」

「はっはっは、だろうな。」

「もう、人ごとみたいに言わないでよ。」

「だって人ごとだもん。」

「それでもよ。」

と言って少し睨まれた。

『では続きまして、今年の入学生で一番魔法の成績がいい人に、この学園の3年生で生徒会で書記をしている、ダンクイズ君と戦って模擬戦をしてもらいます。ちなみに彼はギルドランク＋Aです。では、今年の入学生で一番強い神堂 司君とダンクイズ君は前に出てきてください。』

「おめでとう、人ごとじゃなくなったわね。」

「なぜ俺なんだ、まあ仕方ないか。じゃあ行ってくるわ。」

「頑張って勝ちなさいよ。」

「まあ程々にしておくわ。」

そう言って俺は壇上に向かって行った。

第1章 23話『始業式で・・・』（後書き）

どうも、シオンです。

今回は悩みました。

名前について…。

でもまだ隠している名前がありますがね… W W W

そう、学園長の名前…。

まあ、ギルドの副マスターの弟とだけ言っておきます。

だって、そこまでしか、考えてないし…。

名前つけるの大変ですわ…。

なかなかこれと言った名前が見つからないし…。

何かシックリくる名前と出会いたいものです。

では、シオンでした。

第1章 24話『入学式での模擬戦闘』

俺は、ゆっくりと壇上に上がっていった。

「俺が神堂司だ。で、どうすればいいんだ。」

「おお、君が司君かね、兄から話は聞いているよ。何でも全魔法が使えるとか、実は紅眼の持ち主である事も。」

「はあ、ところで御兄さんって誰の事なんですか？」

「ギルドの副マスターじゃよ。」

「ああ、ジョイさんの弟さんだったんですか理事長は。」

そう言われてどこか、似た雰囲気を感じた。

「で、ここでは何でもありませんか??」

「魔法での対決と言う事になっているが君はどの程度まで、出来るのかね??」

「一応全魔法の上級魔法まではマスター出来ていると思います。」

「出来ていると思う…とはどういう意味かね??」

「はあ、実は昨日図書館に行って上級魔法についての本を見ていたら、上級魔法全集なる物があつたのでそれを読んだだけだから、まだ使った事はないんですよ。一応中級魔法までは難なく使えますから気にしないでください。」

「そうか、では Dankイズ君頑張りたまえよ。」

そう言って反対側の階段の方に立っていた生徒に向かって声をかけた。

「司君少し手加減をしてやってくれ、なにぶん彼は上級魔法を2つしか使えないし、魔力も君ほどないからね。出来れば引き分けてくれれば嬉しいのだが多分それは無理だろうがのう。」

「ええ、俺は絶対勝ちますから。」

「よろしい。では、お互いに頑張りたまえ。」

そう言って、学園長は壇上から降りて席に戻った。その瞬間、壇上に大きな結界が張られた。

『では開始!!』

この声でどうやら始まったみたいだった。

「じゃあよろしくな、悪いけど勝たせてもらうよ。」

「そう簡単にはいかないと思いますよ。」

そう言い返し俺は最初に、炎魔法の初級にあたる『ファイヤーボール』を詠唱破棄で10個作りそれを一気に先輩にぶつけてみた。

「なかなかだがまだまだだな。」

そう言って先輩は水魔法の中級魔法にあたる防御系魔法『ウォーターシールド』を3重で張った。

そして、先輩は急いで詠唱に入った。

『水よ、我と共に…』

どうやら水魔法の上級魔法を使うみたいなので俺は炎と風の上級魔法を急いで唱えた。

『炎よ、風よ、私の力となりて、共に踊らん事あれ。炎は勢いを増し風は炎と共に渦を巻いて踊り狂わん。火炎暴風渦』

『水流爆流』

その瞬間二人の間で大きな水の塊と炎の渦が交差して、水は一気に蒸発し炎は少し衰えたものの、それでも加速し先輩をとらえた。

だが、先輩は先程のウォーターシールドでなんとか堪えていた様だった。

俺はそれならと言わんばかりに、雷魔法のサンダーランスを1つ放った。

もちろん回りは先程の炎と水がぶつかった時に出来た水蒸気が漂っていたので見えない状況、そして先輩はウォーターシールドを張っている。

そんなところに、サンダーランスを放つとどうなるか。

そんなの感電するに決まっている。

水は雷を通しやすいから、当たり前である。

「うわあああゝ。」

そして、俺の思惑通り、先輩にあたった。

そして視界が戻って来た時には先輩は気絶して倒れていた。

『試合終了、神堂司の勝利です。いやあ、いい試合が見れました。今年の一年生は凄いですねえ、上級魔法の、しかも複合魔法を使いこなす様な子がいろいろとわ。司君に拍手。』

その声で、回りはわあゝとなった。

まあ気分はいいがな。

『ところで、司君は最後に何の魔法を放ったのでしょうか?? 早すぎて見えなかったのですが…。』

「ああ、それはサンダーランスを1つ放っただけだ。水は雷を通しやすいからな。まあ軽い電気ショック位の力しかないから命に別状はないだろう。」

『何と司君は魔法を三つも使えるのでしょうか。』

「ううゝん、今は秘密にしておきます。」

『そうですか、では司君ありがとうございました。』

そう言って俺は、自分の席に戻った。

「さすが司ね。」

「そうでもないさ。流石に上級魔法を遠慮なく放ってこられた時は焦ったし。」

「でも、上級魔法の複合魔法を使ったじゃない。」

「あれは、昨日見た本に載ってたから試しに使っただけだ。」

「ああそう。」

シイナは少し呆れたように俺を見ていた。

一体何で呆れているのか分らない俺だった…。

第1章 24話『入学式での模擬戦闘』（後書き）

どうも、シオンです。

いやあ、名前が決まらないww

まあ今更感がありますかね。

一応今日はもう1話位アップ出来ればと考えています。

何と言っても休みが取れたので、夜まで仮眠したいし…。

ぶっちゃけPCの前で突っ伏してしまってたんですがね。

起きたら、2時30分…。

ある意味ビックリしましたよ。

では、シオンでした。

第1章 25話『クラス分け』

そんなこんなで始業式は終わり、今度はクラス分けをする事になったのだが、クラスは一学年で10クラスに分けられるらしい。

何でも、レベルにによるクラス分けなので、クラスごとで強さが異なるらしい。

ちなみに平均のレベルはFだそうだ。

俺みたいに、入学当初で+Aの人間は滅多にいないらしい。

まあ俺が可笑しいのは自覚があるのでこの際置いておこう。

で次に強いレベルが、Bの人間が5人、これも珍しいらしい。

大体強くてもC位が普通なのだが今年はどうも可笑しいらしい。

まあ特異体質の人間が一杯居る様な感じなのかもしれない。

そんなこんなでクラス分けがされていく。

もちろん俺はSクラス、そしてこのSクラスにはシイナ、そしてフランク兄妹も入る事になった。

そして何故か、ストーカーも一緒らしい。

まあストレス発散にもってこいの一発屋だからかもしれないが…
ww

そんな話は置いといて、問題は担任である。

この担任の先生によってこの1年間が有意義になるか決まって来るのだそうだ。

俺達は2年生に誘導されながら教室に向かった。

その途中で何やら俺の方を見て“キャー”と黄色い声が飛んでいたが俺は気にせず先輩について行った。

その時後ろから声がした。

「あつ、ツカサ君Sクラスなんだって??流石ツカサ君ね。頑張るなさいよ。」

と、シンディー先輩に激励の一言を頂いた。

「ああ、シンディー先輩も頑張って下さいね。」

そう言って手を振り返したらシンディー先輩は、じゃあ後でね、と言っ去って行った。

その時少し殺気を感じたが、まあ気にしない方向で行こうと思った。

その後クラスに入り、自分の席を探した。

どうやらシイナと隣で、反対側はフランク兄妹だったので俺は内心ほっとした。

そして、何故かストーカーはシイナの席の前でシイナに猛烈に迫っていた。

その隣には困惑した女の子が立っていた。

「どうしたんだ??」

「あ、ツカサさん、実はそこ私の席なんです、その殿方がどいて下さらないので:。」

「ああ、迷惑してたのか:。すまん、すぐにどけるから。」

そう言くと、俺はストーカーにサンダーランスをぶつけて、風魔法で浮かせると、教壇の上に供えた。wwww

「シイナも何時も大変だなあ:。」

「本当よ。全くあいっつてば人の気持ちも知らないで:。ムカつくわ。それより悪かったわね、あいつが貴方に迷惑かけて:。」

「いえ、気にしないでください。」

「まあ何かあったら俺等に言ってや。」

「はい、ありがとうございます。」

「ところで名前なんて言うの??」

「あつ、すみません、名前はディクシー・F・メイニーです。気軽

にメイって読んで下さい。」

「ああ、よろしくな。俺は神堂司だ。で、こっちが知っての通りマリ・J・シイナだ。シイナは俺の主みたいなもんだ。」

「よろしくねメイちゃん、ツカサはマリー家の執事兼私の友達なの、よろしくね。」

「はい、シイナさんよろしくです。」

「でこっちが、フランク兄妹で、兄のフランク・P・カエイでこっちが妹のジュリアだ。」

「よろしくな、メイちゃん。」

「よろしくね、メイちゃん。」

「はい、よろしくお願いします。カエイさんに、ジュリアさん。」

「まあフランク兄妹とはこの間知り合ったばかりだから、そんなに気にする事はないからな。」

「はい、分かりました。」

と、そんなやり取りをしていると、誰かが、教室に乗り込んできた…。

第1章 25話『クラス分け』 (後書き)

どうも、シオンです。

今日はここまでにしておきます。

明日は、期待の先生…。

乞うご期待wwww

意外な人物が出てくるかもよ…。

ではでは、明日また会いましょう。
シオンでした。

第1章 26話『気になる担任…』

「よし、お前ら席に就け。ホームルーム始めるぞ。」

と言う声と共に一人の女性が入ってきた。

その人は教壇に向かうと魔法で黒板に名前を書いた。

「私の名前はジョイ・F・ニルバーナだ。一応、ギルド副マスターの娘だ。私のギルドランクは知っている奴も多いと思うがSSランクだ。主に使うのは風と雷だ。通り名は『風雷の女神』だが、気軽にニーナと呼んでくれて構わない。ただし私の授業はとことんやるから覚悟しておくように。」

そう言いながら笑顔でこっちを見て来た…。

「それから、神堂 司、お前の事は親父から聞いているぞ。お前、初っ端からギルドランクA+らしいじゃないか。期待してるぞ。」
その瞬間教室が割れた。

『ええー!!!?』

「そんな奴見たことねえぞ…。」

「だよなあ、何者なんだあいつは…。」

「やっぱり、ツカサ君は凄いんだね…。」

とか、色々言われている…。

まあ気にしない方向で行こう…。

「じゃあ、一番から自己紹介していけ。名前、出身地、属性、ギルドランク、後は使う武器位か…。趣味なんかも言っていいいからな。ちなみに私の武器は両手剣で、趣味は日向ぼっこだ。じゃあ一番の…。」

と言う感じで自己紹介が始まった…。

始まってから何故か俺だけ飛ばされた…。

『じゃあ最後にツカサ自己紹介しろ。』

と言う事を言われて、そう言う事かと納得した。

俺は立ち上がり、深呼吸した。

「俺の名前は皆も知っての通り、神堂 司だ。出身地は秘密、属性はお楽しみ、ギルドランクはこの前初めて行ったからA+から変わってない、武器は、刀と言う剣みたいなものを使う。後…、趣味は読書と料理だ。後、一応、シイナの執事として働いている。以上だ。」

そう言うのと皆が手を挙げて聞いてきた。

「何で出身地秘密なのよ。」

「それより属性は何なの…?」

「いや、なぜ初っ端からA+なんてランクに入れたのが先だよ。」

『で、どうなの…?』

と言う女子からの質問攻めにあった俺は…。

「秘密にした方がかっこいいだろ。」

と流した。

すると…。

「それより、執事ってなんだよ。」

「そうだ、それよりシイナさんとはどう言う関係なんだよ。」

「と言うか、今日女先輩に話しかけられてたがあの人是谁で、どう言う関係だ。」

と、クラスの男子から質問攻めにあった。

「ほほおう、私も気になるなあ…司君。」

と笑顔で楽しそうに先生も絡んできた…。

って先生そこ絡むところじゃないでしょ…。

「えっと、シイナとは執事であり学友である。…と言われている。後、今日話しかけられた先輩は2年生のケイト・R・シンディーって先輩でこの間学園に初めて来たときに出会った人だ…。」

「へえ、その割には結構いい雰囲気だったなあ…。」
と何故かシイナのストーリーカーにまで絡まれた…。

「そうか、ってか話しかけてくんよ、変態が…。」

そう切り返すと、落ち込んだ様にガクツとうなだれた…。
まあ気にしない方向で…。

「はいはい、とりあえず席につけ…。」

そう先生の一声で皆は静かに仕方なく席に戻って行った…。

「じゃあ、私が質問しよう…。何故、ツカサはそのシンディーさんと出会ったんだ？？と言うよりも出会えたのか？？って方が正しいな…。確かケイト・R・シンディーって言ったところ、の第三王女じゃなかったか？？」

「ええそうですね…。確かに、彼女は第三王女らしいですね…。」

「らしいって…。まあいい、で、どんな風に出会ったんだ？？」

「省略すれば、彼女がガラの悪そうな御兄さんに無理やり連れて行かれそうになっていた所を助けたら学園の事とか色々教えてもらったりして仲良くなりました。」

「ほお、色々とは…？」

「学園での注意事項とか、授業内容についてとか、あと昨日は偶然外であつたので図書室に案内してもらって本を借りてもらった位ですかね…。後は、今朝もたまたま会って、席に連れてってもらった事位ですね…。」

と俺が答えた瞬間に

『なあに…。』

『ええ…。』

と男女共に何故か叫びだした…。

「ほら、お前ら静かにしろ。で、ツカサ、お前はあの時いずれも一人だったのか？？」

「いえ、助けた時と図書館に連れて行ってもらった時以外は俺の他にも、いましたよ。」

「ほお、誰がだ？？」

「助ける時は列車の中で友達になったフランク兄妹とシイナと俺の4人で買い物をしていたのですが…危ないので一人で助けに行っただけです。それからは5人で色々と話をしただけです。朝はもちろん、シイナと一緒にだったので…。まあ執事ですから…ww」

「ふうりん。じゃあもう一つ質問…。どうして、ツカサ君はシイナさんの執事をしているんだい??」

「それは…、俺には…両親がいないので…。」

「そうか…。と言う事らしい…。よかったな皆、まだまだチャンスはありそうだぞ。」

と言うと、教室の連中は…。

『よっしゃあゝ、まだまだ俺達にもチャンスが…。』

とか、

『これからよ、これから…。』

とか、何故か知らないが皆喜んでいた…。

意味が分らん…。

シイナの方を見ると、少し複雑そうな表情をしていたので、とりあえず何も言わない事にした。

こうして波乱の自己紹介は幕を閉じた…。

第1章 26話『気になる担任…』 (後書き)

どうも、シオンです…。

いやあ、参っちゃったよ…。

名前決めるの…。

何にしようか、ピンツと来ないから二日もかかってしまった…。

読者の皆様待たせて申し訳ありません。

作者まだまだ未熟ゆえ…。

今回は、基本的に、主人公は鈍感って所をアピールしました。

やっぱり強くて完全ではなく一つ可愛いところがあつた方がいい…。

みたいな…www

萌え要素ですね…。

強いていうなれば、ツンツンが転んだ時に言い訳する時みたいな…

ww

ごほん…少し脱線してしまいましたね…。

すみませんorz

作者これからも頑張る故、皆さんも頑張って読んで下さい。

シオンより、読者の皆様が笑顔でいられますように…。

第2章 1話『初めての授業…』 (前書き)

ここから、新章突入です…。

まあ、今までの長い長い前置きみたいなモノと考えて下さい。

ここからは、1学期編みたいになる予定…。

まあ予定は未定ですがね…。

第2章 1話『初めての授業…』

入学してから次の日、今日から初めて、授業が始まる訳だが俺は凄く緊張していた…。

そりゃ初めての魔法の授業だもん、当たり前である。

そんなこんなで俺は今、シイナとフランク兄妹と一緒に学園に向かっているのだが凄く気になる…。

回りの視線が…。

女子も男子も俺を見る…。

やはり入学式の印象が目茶苦茶強かったらしく、物凄く見られていた…。

「はあ、今日の授業は何をするのかなあ…。」

「まあ、最初の授業は魔法についての知識の授業と、属性についてと、魔法の構築式について、後は魔方陣の書き方とか、召喚について位かな…。」

「へえ、って大体分かるけど召喚って何…?？」

「召喚は召喚だよ。使い魔召喚…。これは、1年生になってある程度魔法が使えるようになってから使い魔を召喚する事が出来るようになるんだ。」

「へえ…。でもどうして、ある程度魔法を覚えてからでないと駄目なんだ??？」

「それは、たまあゝに戦闘を好む者がいて、戦って勝てたら使い魔になってやるって言う使い魔もいるらしいからだよ。」

「へえ…。ところで、使い魔は一人何体まで使役出来るんだ??？」

「その人の魔力によるわね…。1体の人もいれば、最高で3体使役している人も居るって聞いた事あるけど、ツカサは多分5体は余裕

じゃないかな??」

「5体も使役出来るのかよ…。ツカサはやっぱり凄いんだなあ…。」
「そうねえ…。ツカサ君はやっぱり凄いんだねえ…。」

そんな風に話ししながら俺達は教室に向かった…。

そして、初めての授業が始まった。

最初の授業はこの大陸にまつわるお話だった。

「ええ、では知ってる奴もいると思うが今から10000年前位の話をしようと思う。これはいわゆる伝説の話だ。今から10000年前に、シェンドウ一家と言うがいたらしい。この一家は代々と言っても5代までしかないのだが、その全員が全属性魔法と紅眼だった。そしてそんな中でも当時最強と言われていたのがシェンドウ・ユーだった。そんな彼には妻と子供がいたのだが、妻の名前はマイ、

子供の名前は、チュカシャだった。そんなシェンドウ夫婦は中睦まじく平和に暮らしていたのだが、しかしある時、シェンドウ家の二男であった、シェンドウ・ケイが悪魔に魂を売り悪魔の大魔王になっちゃったのだ。そこでシェンドウ一家はそんな弟を助けるために戦ったのだが悪魔に魂を売ってしまったので悪魔に魂を食べられてどうする事も出来ず、また、シェンドウ・ユーとマイの二人一緒に戦っても勝つ見込みはほぼなかった。そこで、息子であるチュカシャを時空の狭間に落とし記憶と一緒に封印して、異次元に送ったらしい。そして、二人は息子に全てを託し、最後の力を使い、大魔王を封印する事に成功したのだ…。しかし、それとひきかに、一人息子を未来に送り、自分達は最後の力を使い切り死んでしまった。と言う御話だ。」

「ああ、聞いた事あるよ。何でも古い言い伝えらしい。」

「じゃあまたその大魔王は蘇るかもしれないの??」

「そうらしいよ、何でもその5年前には異次元に送った息子がこの

世界に来るらしい。」

「ぶう…。」

「どうした、ツカサ、顔色悪いぞ、大丈夫か?？」

「あつ、ああ、大丈夫だ…。」

「すみません、先生ツカサ君気分悪いそうなので保健室に連れて行つてきます。」

「そうか、じゃあシイナ頼んだぞ。」

「はい、わかりました。」

そう言つて俺は、シイナと一緒に教室を出て、保健室へと向かつて行つた。

「ツカサ、さっきの話…ひょっとして…。」

「ああ、思い出したよ…。多分あつてる…。」

「そう…。私が…ツカサを…守るからね…。」

「ありがとうシイナ…。」

こうして、俺は30分程保健室で少し休んだ…。

第2章 2話『体術の授業で…』

俺は少し考えていた。

（さっきの話では親父とお袋は大魔王を封印したと言っていた。そして、俺は別の世界に飛ばされたとも…。そして俺がこっちに來て5年後には大魔王は復活すると言う事。そして何故この年で飛ばされたのか??それとどうして5年後に復活すると言う事が分っているのか。そして最後に、どうして大魔王の封印が解かれようとしているのか…。ここが一番重要なんだよね…。）

本来あの封印は、誰かが手を加えない限り、解けない代物…。

なのにその封印が解かれようとしている…。

しかも、大魔王の封印の場所は普通の人間では行けないような場所…。

何より、大魔王の封印の場所すら分らないのに何故解かれようとしているのか…。

謎は謎を呼びそして最後に行き着いた場所は、『封印が完全ではなかった』と言う結論だった。

よくよく考えれば当然である。

司の両親は必至で司を守り、時空転移で別の場所に飛ばした。

そんな二人に、奴を完全に封印する力が残っていたのであろうか…。

答えは否だ。

そうだな…、俺を守るために、俺に期待を込めて親父達は封印したんだな…。

じゃあやる事は一つしかない。

それは強くなるために、皆を守る様な力を手に入れるだけだ。

そう思うと俺は教室に向かって行った…。

教室に戻ると皆心配して『大丈夫か』とか、声を掛けてくれた。

それが少し、暖かくて気持ち落ち着いた。

そうこうしていると、ニーナ先生が入ってきた。

『よし、お前ら全員居るな。今から訓練場まで案内してやるから獲物を持ってついてこい。』

そう言うのと皆武器を持ち訓練場に向かって行った。

「よし、今から体術の授業に入る。この場所は、どんな攻撃を受けたとしても、魔法を使ったとしても確実に治る魔法が掛かっている。だから、どんなに死んでも死ねないから安心しろ。」

そう言うのと皆少し不安そうな、安心した様な顔で先生を見返していた。

「では練習に入る前に、少し模擬戦闘を見せたいと思う。じゃあ、ツカサこい。」

そう言われて俺は渋々先生のもとに行った。

じゃあ、今から模擬戦闘をするが、場所はとりあえず、あそこでいいか、と指差したのは目の前のSランクよう、戦闘訓練室だった。
(おいおい、何する気だよ。)

思いながら先生と一緒に訓練室に入って行った。

「じゃあお前らはその結界の窓から私達の、戦闘を見て勉強しておくように。」

そう言って先生も中に入った。

「じゃあ始めるか。」

そう言うやいなや先生は消えた。

「ちょ、反則だろ。」

と言いながら俺は抜刀しながら横になぎ払い先生の攻撃をかわした。

「ほお、今のをかわしたか。」

「危ないじゃないですか。」

「ところで、お前の持っているのは剣なのか?？」

「ええそうですよ。こいつは『紅桜』って言って、刀と言う種類の剣だ。」

そう言った瞬間『紅桜』が光って覚醒した。

「あつ、すいません。これが本来の紅桜です。」

「ほお、いい剣だな。ところで、そいつは何か特殊能力があるのだろう。」

「はい、多分ですが、どんな魔法も利かない、いわゆる魔法解除能力があると思います。」

「なっ、お前そんな剣で私に攻撃してきたのか。普通ここでも死人が出る様な剣じゃないか…。バカかお前は。」

「へっ、やっぱり、ここでも治らないですか?？」

「当たり前だ、仕方ない、今からは、素手ですか。」

「そうですね…。」

「じゃあ行きますよ。」

そう言う俺は雷と風の属性付加を使い、移動した…。

第2章 2話『体術の授業で…』 (後書き)

どうも、シオンです。

今回は体術の授業だったのですが、紅桜の特性をすっかり忘れていた作者はそのまま、先生とバトルさせようとしてしまい、まあいかみtainな感じでこんな風になってしまいましたWWW

次回は素手の喧嘩辺WW

乞うご期待。

ではではシオンでした。

第2章 3話『試合終了…』

「うわあゝ。やっぱり凄いんだなあ…。」

「俺達とは格が違う感じがするぜ。」

「てか何だあの早さは、人間じゃねよ。」

「こんなの見せられても勉強にならないって、レベルが違いすぎて…。」

「先生も無茶苦茶言うなあって思ったけど、そんな事なかったみたいね。」

「ほんとよね、ツカサ君ってこんなに強いんだ。」

「先生と互角ってよりもまだ先生の方は少しは余裕がありそうな感じに見えるけど…。」

「あの、風雷の女神とやりあうなんて凄いなあゝ。」

などと他の生徒は思い思いの感想を述べていた。

「ツカサ君ってどれ位魔法使えるんだろうか?？」

「先生は風と雷、ツカサ君はこの前に、雷と風と炎を使ってたからここまでは分ってるけど、後は謎なのよね…。闇なのか、光なのか…。」

「流石に、どっちもって事はないよねえ…。」

「ああ、それはマズないだろう。それならばもう既に騒がれていてもおかしくないからな。」

「でも俺らでも、あそこまで属性付加を使いこなせないのに、何でツカサはあんなに使えるんだろう?？」

「それよりも、上級魔法を使えるって所が可笑しいって。」

「でも、ツカサ君って上級魔法最近覚えたって聞いてたけど?？」

「そういや言ってた様な…。」

「結局のところ飲み込み早い器用な人なのかな?？」

「まあそんなところじゃないかしら。」

「そう見たら普通なんだな、飲込みが早いって所以外は…。」
「おっ、そろそろ決着がつくみたいだな。」
「そう言って皆一斉に部屋の中を見た。」

「はあはあはあ…先生、なか…なか…やり…ます…ね。」

「司も…よく…ついて…きたな。大した…もんだ。」

「じゃあ、そろそろ…決着を…つけますか…。」

「そう…だなっ!!」

そう言って先生は俺に向かって突進してきた。

俺は、咄嗟の事だったので反応出来なかった…。

のだが自然に体が動いた。

気付いた時には先生を投げていた。

いわゆる柔道の一本背負いである。

こうして決着はついた。

武器なしの接近戦では先生には少し部が悪かった様だ。

「先生、大丈夫ですか?」

「ああ、しかし最後のは何だ??」

「あれは背負い投げて言って、俺の故郷の武芸の技の一つです。
昔少しだけかじってた時に覚えた奴が咄嗟に出ただけなので、まあ
まぐれですね。」

「そうか、咄嗟に出た技で負けたのか…。そうか…。」

「まあ、男と女ですから力の差もありますから仕方ないっすよ。」
と、落ち込んだ先生を慰めるのも忘れない。

「今日は勉強になった、ありがとうな。次は負けんからな。」
そう言った先生は、どこか嬉しそうだった。

「ところで、先程の技なのだがどうやってやったのだ??教えてく
れないか??」

「ああ、あれは突進してきた先生の腕をまず掴んで、腰を落として

突進の力を利用して、腰に引き寄せて、そのまま腰を上げれば簡単に上がるんですよ。そしてそのまま、投げる、それだけですよ。まあ掴んだまま相手を倒して、そのままナイフか剣で切って殺す方法もありますけどね。」

「ほお、なるほどなるほど。今度から、私の練習に付き合ってもらいたいものだ。」

「俺からもお願いしますよ。先生には色々教えてもらいたいし。」

「そうか、だったら今日から夕方は、特訓だな。」

「了解っす。」

こうして、俺と先生は特訓する事になった。

正直、先生の移動方法はとてもじゃないが俺には出来なかったのだからそれを教えてもらおうと思ったからOKしたのだった。

先生は雷と風の属性付加だけであのスピードだが俺は風と雷と炎の属性付加を使ってようやくあのスピードが保てるようになる。

つまり今の俺には無駄が多いのだ。

それを解消するために俺は先生の申し出を飲んだのだった。

部屋を出ると、外では待ちかねたとばかりに、皆が待っていた。

「それじゃあ基礎から教えるからな。体術の基礎は己の魔力を感じて自分自身の属性で肉体を強化しその特性を生かした上で、行う。よって今からはこの属性付加を学ぶ事だ。まず、属性付加の魔法が使える者は私のところに来い。後のものは、ツカサにでも教えてもら。」

「ちょっと先生、俺は無理ですよ。」

「どうしてだ??」

「俺の属性付加は無理やりしてるからです。」

「どう言う意味だ??」

「俺のやり方は、魔力をその属性にかえてそれを自分の体内で爆発

させてるだけで、しかも、魔力もとんでもなく使ってこそはじめて出来る、いわば付け焼刃なんですよ。よって教えるのは不可です。それに先生のやり方をコピーしただけの様なものなので無理なんですよ。」

「そうか、ってちょっと待て、今何っていた??」

「だから、先生のやり方をコピーしたって言ったんです。まあ、もう一つの属性も使ってなんとかマネ出来たみたいなのなんですけどね。」

「じゃあお前は見ただけで、私の技を使用したのか??」

「はい、何か可笑しいですか??」

「当たり前だ。そんな事普通の人間には出来んぞ。」

「魔力の流れとかって見えないんですか??」

「そんなモノ見える訳ないだろう。」

「そうですか…。先生少し、今日は帰ってもいいですか?? 調べた事が出来ました…。」

「そうか…。分った、お前がそう言うのなら仕方ないな。」

「すみません。」

こうして俺は、難なく先生の許可をもらい授業をさぼった：ww

第2章 4話『神堂家…』

俺は先生の許可をもらい授業を休み学園長室に来ていた。

俺はドアをノックして「失礼します。」と言い学園長室に入って行った。

「おや、神堂司君じゃないかね、どうしましたか??」

「ええ、一つ聞きたい事があるのですが、よろしいですか??」

「ああ、構わないよ。実は、俺の目についてなんですよ。」

「君の目と言えば紅眼だったな。それがどうかしたのかね。」

「実は俺には魔力の流れが見えるんですよ。」

「ほお、魔力の流れとな…。」

「はい、風雷の先生に聞いてみたら、そんな奴はきいた事ないと言われまして…。」

「で、ワシに聞きに来たのか。」

「はい、調べてもよかったのですが聞きに来た方が早いかもしれないと思いますので…。」

「賢明な判断な。そうじゃのお…。知らないと言えば嘘になるが聞いてみるか??少し曖昧な話なんじゃがの。」

「今のところそれしか、方法が残ってなさそうなので、お願いします。」

「よろしい、では話をしよう。」

そう言って学園長は語り始めた。

「1000年前の大魔王の話は知っているな??」

「ええ、今日の1時間目に聞きました。」

「実はな、あの話の中でシェンドウ一家は魔力の流れが見える家系であった事が昔言われていたらしい。そしてその眼は紅眼の様に赤い目であつたらしい。そしてここからが重要なんじゃが、この目は一族の中でも族長にしかなかったんじゃ。」

（えっ、じゃあ俺はシェンドウ家の族長って事か…。）

「じゃがの、シェンドウ家は大魔王を封印した際に殆どが滅びてしまった。しかし血筋は消えなかったんじゃ。そしてその子孫にその目は受け継がれて行ったのじゃが、今ではギルドマスターである、シェンドウ・W・クラスタインが受け継いでおる。まあ奴は、シェンドウ・ワカナの血筋を引いているらしいからな。ちなみにワカナは、ユーの父親の妹にあたるらしい。まあどうでもいいがのお。ちなみにクラスタインは、忙しくて滅多に姿を見せないんじゃ。一度会って話を聞いてみるといい。今度、さり気無く聞いてみるからの。神堂司君、多分君はシェンドウ・チュカシャ何じゃろお?? 私の勘が正しければ…。」

「ええ、多分そうです。時間が経って語り継ぐ際に少し濁ったので呼ばれ方が微妙に変わってしまったんでしょう。本来は神堂、これが正しい呼び方です。」

「ほお、そうじゃったか…。では神堂君、君には色々としてもらいたい事があったのだよ…。」

「何をですか??」

「もちろん、モンスター退治じゃ…。」

「モンスターってどんな奴ですか??」

「まあ色々じゃな、ゴブリンやスライムのように弱いモンスターから、ドラゴンや悪魔と呼ばれる者までおる。今一番厄介なのがこの近くの森で最近大量発生したゴブリン達じゃ…。」

「えっ、それってギルドじゃないんですか??」

「そうじゃ、じゃからこれはギルドランクA+の君に頼みたいのじゃ。まあ実践などぼした事ないのじゃろう?? 丁度いい腕試しと思ってくれて構わない。報酬もキチンと出すからの。」

「そこまで言うならやらしていただきます。」

「うむ、頑張るのじゃぞ。それから、これは、御主にやろう。前の賞品じゃ。」

そう言って一つの指輪をもらった。

「それはの魔力を貯める事が出来る指輪なんじゃ。どれくらい貯め

れるかは分っておらんのだが、君の目と同じ位は貯める事が出来ると噂では聞いている。まあ何かの時の為にコツコツと貯めておきなさい。」

「わかりました。ありがう御座います。しかしいいのですか??結構お高いんじゃない?。」

「魔力があつたとしてもそいつは出来るものにしか使う事が出来ないのじゃ…。まあその点、ツカサ君なら大丈夫じゃろう。」

「まあ多分…。」

「じゃあ期待して待っている。そうそう、後何か願いがあつたら、今の内に言っておきなさい。」

「じゃあ、一応上級魔法は全て覚えたので、それより上の魔法書があれば貸して欲しいのですが…。出来れば禁書扱いのやつとかも…。」

「わかった。それは君の頑張り次第という事でどうじゃ??。」

「わかりました。精一杯頑張ります。」

「よろしい。じゃあ頼んだぞ。」

「はい、ありがとうございました。」

そう言って俺は校長室を出て行った。

第2章 4話『神堂家…』 (後書き)

どうも、シオンです。

なんだか、最近込み入ったお話になってきている様な気がしてなりません。

まあいいんですがね…。

あんまり、細かくすると後になって響いて来るから困りますが…。

まあ頑張りますよ。

一応目の話はこの様な感じにしましたが、しかしまだ目の事に関しては沢山出てくる予定です。

次の予定は、未定ですが又明日も頑張ります。

では、シオンでした。

第2章 5話「モンスター退治に向けて…。」

俺は校長室を出ると、とりあえずモンスターについて調べる事にした。

やはり、戦う前に敵の能力やら、力などは知っておかなければいくらなんでも無茶だろうし…。

「俺はそこまで無謀じゃないからな。」

などと独り言を口走りながら図書館に向かった。

この前来た時は先輩がいたから楽に目的の本を見つける事が出来たが今回は一人なので目的の本を見つけるの大変かもしれない、とか思っていると前方から見知った顔が歩いてきた。

「あれは確か…。メアリーさんじゃなかったかな？？おい、メアリーさん。」

大声で呼んでみた。

すると、メアリーさんはこっちに向かってきた。

「あらツカサ君、授業はどうしたのかな？？」

「許可とって休みました。調べたい事と学園長からの依頼もあるの…。」

「そうなんだ。で、どうしたの私に聞きたい事があるの？？お姉さん何でも教えちゃうわよ。」

「あっ、助かります。実は今から図書館に行って本を借りに行こうかと思ったのですが、目的の本を探すのにあそこは俺一人じゃ手が足らないので一緒に探してもらえたらと思ったのです。」

「あら、いいわよ。私は大抵暇だから図書室よく利用するのよ。で、ツカサ君はどんな本をご所望なのかしら？？」

「モンスター大全集です。」

「ああ、あれか……。またマニアックな物を読むのね。」

「へっ？？何処がですか？？」

「だってモンスター大全集とかって……。キャッ！！」

とか、顔を赤くして一人で妄想をしていた。

「別に変な意味はないですよ。ただ単に、学園長にモンスター退治を依頼されたので、モンスターの弱点とか特性を調べただけですから。」

「あら、そうだったの。私でっきり……##」

メアリーは妄想からなかなか帰って来れないのだった……。

その後なんとか、メアリーさんを元の？？世界に戻す事に成功した俺は、一緒に図書室へと向かって行った。

その途中で話をしていたのだけどもうメアリーさん自身も暇なので図書室に本を借りに行こうと思っていた所だったらしい。

俺の回りには本が好きな人が結構いる事に気付き、助かったとこの時ばかりは思ったのだった。

そうこうしている内に図書室についた俺は早速メアリーさんに頼みその本の場所を教えてもらい早速借りる事にした。

「でも、お目当ての本があってよかったわね。」

「ええ、本当にメアリーさんには感謝してますよ。」

「じゃあ今から一緒に読書の時間と行きましょう。」

「何処ですか？？」

「じゃあ……あそこなんかはどうかしら？？」

そう言っただけで彼女が指したのはこの前、皆で行ったオープンカフェだった。

「いいですよ。丁度お腹も空いていたので。」

「あら、ランチは??」

「実は、まだなんですよ。」

「それなら早く言ってくればよかったのに。」

「すみません…。」

そんなこんなで俺達は、カフェに入り、本と睨めっこしながら、サンドイッチを食べていた。

と、そこで少し気になる事が出来たので、メアリーさんに聞いてみる事にした。

「あの、すみません…。」

「どうかした??」

「実は、この辺りの森で暴れてるって言うモンスターはどんなモンスターなのか分らなくて…。知りませんか??」

「ああ、それなら…このモンスターよ。」

と言って指したのは『オリエント』だった。

何々：『このモンスターは、飛行能力はなく素早さもない…、しかし奴にはとんでもないパワーと、地属性の魔法まで使えて中々に賢い奴だ。油断すると、奴の餌食になるかもしれない。力は、普通のオリエントなら簡単に樹をへし折る事が出来る。奴は飛べないので空からの魔法攻撃には弱い。簡単に倒したいのならば、炎と風と地の複合系上級魔法のビクバーンで一発で終わらせる事も出来る。』

しかしこいつは本来穏やかな奴なので話し合いで解決する時もある。

』と書いてあった。

「へえ…。とても助かりました。ありがとうございます。」

「いえいえ、ツカサ君の役に立ってよかったわ。で、もう行くの??」

「はい、別にこの刀とさえあれば何にも要らないので、ただ場所が分りにくいってのが難点ですが…。」

「じゃあ地図でも書いてあげましょう。」

「ありがとうございます。」

そう言って、メアリーさんは俺に地図を渡してくれた。

こうして俺はオリエントを倒す??べく、森に向かって行ったのだった。

第2章 5話「モンスター退治に向けて…。」（後書き）

どうもシオンです。

今回は次回予告篇ですWWW

次回は、オリエントとの対決???と思いますがところがドツコイ、
そうではないのです…。

じゃあどうなるかって???

それは明日のお楽しみWWW

まあ強いて言えば…。

いや、やっぱりやめておこう。

続きは明日…。

では。

第2章 6話『森の入り口にて…』

俺は歩くのが面倒だったので、フライを使い森まで飛んで行った。

森の入り口に着くと何やらモンスターらしき気配がした。

俺は急いでその方角に行ってみると一人の女性が、何やらモンスターと対峙していた。

「はあはあはあ…いい加減…シツコイなあ…。」

見ると女性は大きな剣を持ちそしてそれを軽々と振り回していた。そして特徴的なのが耳である。

普通の人には絶対にならない様な細長い耳をしていた。

とそんな彼女を見ていると後ろからもモンスターがやってきて襲いかかろうとしていた。

「危ない。」

俺は咄嗟に彼女の包囲に俺お得意の結界を張った。

そして次の瞬間モンスターはその結界に触れて電流が走りどこかに逃げて行った。

「大丈夫か??」

「…フン…あんな奴ら私一人でも大丈夫だったわよ。私に話しかけないで。」

そう言っただけ彼女は立ち去ろうとしたので、俺は手をつかんだ。

「チョット待ってよ。君に聞きたい事があるんだ。」

「放してよ。人間なんて大嫌いな。」

「何故??君は人間ではないの??」

「…貴方…頭大丈夫??ちゃんと目ついてる??」

「当たり前じゃないか。」

「私はエルフよ。ここまで言えばわかるでしょ??」

「エルフって何??」

そう彼女はエルフだったのだ。

『エルフとは魔族の一種で、ホーリーエルフとダークエルフの二種類居るらしい。もちろん性別は男女である。ちなみにエルフは身体能力が高く、力が強く、早い。そしてホーリーエルフは聖魔法に長けており、ダークエルフは闇魔法に長けているらしい。そして寿命は人間の約3倍らしい。』

「へえ、それで何故人間を嫌うんだ??」

「お前は何も知らないんだな。」

そう言うとき彼女は溜息をついた。

「まあこの世界に来てまだ2週間経ってないからね…。今日で10日目かな??」

「何?!? お前異世界人なのか??」

「いや、元々はこっちの世界に住んでたんだが…。訳あって小さい頃に別の世界に飛ばされてたんだ…。」

「そうか…。それはすまなかった。」

「別に気にする事はない。今では昔の記憶も大体は思い出したし…。」

「じゃあ話を戻すぞ。お前は、魔人戦争を聞いた事はあるか??」

「いや、ないな。何年前の話だ??」

「約、5000年前の話だ。」

「だったら聞いた事はないね。俺が飛ばされたのは、もっと前だからな…。」

「そうか…。その戦争でな、人と魔族が戦争をしたんだ。もちろんエルフも戦った。魔人として。その戦いでは沢山の人と沢山の魔族が死んでいった。そしてその時から、魔族と人間の因縁が深くなっ

た。だから、人間はエルフを嫌う。もちろんエルフも…。」

「へえ〜。そんな事が…。でも昔の事だろ。今更そんな事言われても俺は助けたかったから、助けただけだ。エルフだからとか、魔族だろうが結局は生きているのに変わりはない。違うか??」

「まあそうだな…。」

「俺は出来れば…皆を救いたい…この目に映る全ての生きている奴らを…。」

「御前は不思議な奴だな…。名は何と言う??」

「俺の名は神堂司だ。」

「神堂…司…。私の名はメヒエル・O・マリーン。気軽にマリーンと呼んでちょうだい。」

「分ったよマリー。でもマリーは人間が嫌いなんじゃ…。」

「司は私を助けてくれたもの。それに私が貴方をきにいったの…駄目??」

「駄目じゃないけど…。」

「じゃあ契約しましょう。」

「契約って何??」

「契約ってのは魔族を使役させる為の、召喚魔法とかの一種よ。この場合は両社の合意であれば儀式を行う事で相手を使役させる事が出来るの。」

「へえ〜。いいよ。」

「ありがとう、司。じゃあチョット手を出して??」

そう言われたので俺は手を出した。

すると彼女は俺の指に小型のナイフを刺してその血をなめた。

「あら、司の血美味しわね…癖になりそう。」

物騒な事この上ない…。

そして彼女も自らの指をナイフで切り俺にその指を嘗めさせた。

…すると、俺とマリーの回りに魔方阵が現れた。

「私に同じ様に言ってね。」

そう言うのと彼女はこの様に言った。

『私、メヒエル・O・マリーンは神堂司の従者として、彼と共にあり続け、どんな時も共にあります。』

『俺、神堂司はメヒエル・O・マリーンの主人として彼女を導き続けます。』

そう言うのと、魔方阵は消え徐々に光も消えていった。

「これで私は司だけのモノになっちゃった…。」

そう言うって彼女は赤くなっていた…。

第2章 6話『森の入り口にて…』（後書き）

予想外の展開に…w w w

いや、作者も書いてて、えっ？？

なにこのカオスはって感じになりましたよ…w w w

まあそれも良しと言う事で…。

書いてる本人ですら予想外…。

でもよくあるよね…。

森でモンスターに襲われてる女の子…。

でも女の子じゃなくて魔族にしてみました。

ちなみにこのメヒエルって名前は天使の一種で、善き方向に向かう
様に見守る天使らしいです…w w w

では…。

第2章 7話『暴れた理由…』

「ところで司は何でこの森に来たの??」

「ああ、俺は今年この学園に入学したばかりなんだが学園長に森で暴れているモンスターをどうにかしろって言われてな…。それで来たんだけど、来て早々可愛い女性がモンスターに襲われてたから助けたって訳だ。」

「可愛いだなんて…。って、ツカサはまだ1年生よね、どうしてこんな所に一人で来れるのよ。」

「だって俺ギルドランクA+だし…。」

……………。

時が止まった。

次の瞬間。

「ええ……………。」

と言うマリーンの驚いた声でこの森は支配されたのだった。

それから数分間俺はあらかたの経緯を説明した。

「ふう〜ん、大体分ったわ。」

「で、その暴れてるモンスターってのは何処にいるんだ??」

「ああそいつなら多分森の中央にいる奴ね…。確か、オリエントだったかしら。」

「そうそう、そいつそいつ。」

「だったら、案内してあげるわ。ついてきなさいよ。迷っても知らないんだからね。」

そう言っただけでマリーンは歩いて行ったので俺はついて行った。

そうこう歩いているうちに、奇妙な破壊音が聞こえて来た。

『ドーン、ドーン!!?』

「何の音だ??」

「多分オリエントよ。奴は普段大人しいハズなんだけど、どうしたのかしら??」

「話し合いで解決できればなあ…。」

「私が居るんだから…もっと強気でいなさいよ。」

「ありがとう、マリィ。でも無駄な殺生は避けたいかな…。」

「司は優しいね…。」

「そうかな??」

「うん、すごく優しい。」

そう言った彼女の笑顔はとてもまぶしかった。

流石はホーリーエルフである。

暗かった心が少しだけ明るくなった様な感じがした。

そうこうしているとオリエントが見えて来た…。

「あいつ…デカイな。」

そうデカイのだ。

大体5m位はありそうだ。

「なんだか恐竜みたいだな…。」

「恐竜って何??」

「俺が前に住んでいた所で昔生きていた生物だ。ただし、奴らはしゃべれない。」

「そうなんだ。」

「じゃあチョット行って来るから少し待っててくれ。」

そう言う俺は魔法で飛んで奴の真ん前に浮かんだ。

「チョットそのオリエント、どうして暴れている。」

「何だ人間、そこをどけ、邪魔をするな。ワシは今物凄く腹が立っているんだ。」

「何故、怒ってるんだ??」

「ワシの息子が理由もなく連れて行かれたんだよ。」

「誰に??」

「分らんからこうして暴れているんだ。もしや…貴様が息子を…。」
そう言うのと、オリエントは俺に襲いかかってきた。

俺は咄嗟に魔法で結界を張るとすぐさま氷魔法で足場を固めて奴の足元を狙って少し大きめ丘を土魔法で作った。
すると案の定こけた。

「む、お主ずるがしこいな…。」

「そんな事はないさ。で、その息子ってどの位の大きさなんだ??」

「ああ、今で生まれて3ヶ月になるから大体大きさとしては、1m 50cm位だ。」

「特徴はないのか??」

「ワシに似ているとしか言いようがないなあ…。」

「そうか、まあ少し待ってろ、上から探してきてみよう。」

「むむ、すまない…。」

そう言う俺は御辞儀をした。

意外と紳士的な恐竜であった。

俺は、マリーに事情を説明するとすぐに仲間達にも聞いてみると言い何処かに行ってしまった。

俺は、もちろん空からこの森の隅々まで探して回った。

しかし、オリエントの赤ちゃんらしき物は見当たらなかった。

帰ってみるとオリエントはまだ、横になっていた。

相当探し回っていたせいかな疲れていたのだろう。

「空の方は駄目だった。この森から出て行ったのかもしれない。」

「そうか…。私の息子よ…。何処に言ったのだ…。」

そんな切なそうな顔をされると、こっちも泣きたくなる…。

とそんな時、何処からか声がした。

多分念話だろう。

『司、司。』

「どうした、マリー何かあったのか?？」

『それがオリエントの赤ちゃんを見かけたって言ってる奴がいるの。』

「何、本当か?？」

『ええ、本当よ。何でも、湖の方に向かって行ってたって聞いたわ。』

「湖か…。よし俺はすぐに向かうが、マリーはどうする?？」

『私はもちろん行くわよ。使い魔が御主人様をほったらかしになんて出来る訳ないじゃない。』

「そうかじゃあ現地で落ち合おう。」

『チヨット待つて司。それよりいい方法があるわ。』

「何だ?？」

『私を呼び寄せればいいのよ。使い魔契約した使い魔ならば、好きな時に呼び出す事が出来るのよ。』

「なんだ、そんなこと出来るのかよ。」

『だから、司が先に着くと思うから、そしたら私を呼び寄せてね。待つてゐるわよ、御主人様。』

「分ったよ。じゃあな。」

そう言つて俺は念話をやめた。

「どうやら湖に向かつて行つたてのを見た奴がいるそうだが何か心当たりはないか?？」

「実は、今俺の妻が寝込んで、それで、湖の近くで咲いている白い花さえあれば…。と言つてしまつたんだ…。あの子はそれを取りに行つてしまつたのか…。」

「そうか、だったら俺が両方とも持つてきてやる。」

「すまない、人間よワシは少し疲れたのでここで待たしてもらふよ。」

「そう言つて彼は、眠つてしまつた。」

俺は急いで湖の方へと向かつた。

第2章 8話『呼ばれて飛び出て』

メアリーさんの地図を頼りに俺は急いで、湖に向かった。

湖は、丁度学園シティの裏（南）にある森から、更に南に行くと山があるのだが、その山の中腹にある。

森から行った場合、その湖から流れる川を一度渡り、そして山を登らなければならない。

おそらく、上手くいけば湖であえるだろう。

そう考えた俺は、急いでオリエントの子供を探しながら向かった。

しかし湖まで来たが見つからなかった…。

どこかで見落としたのかもしれない…。

俺は念話でマリーに語りかけた。

『マリー、マリー。』

『何？司。もうついた？？』

『ついたけど、子供が見当たらない…。』

『とりあえず私をそっちに召喚して。』

『召喚の仕方が分らないのだが…。』

『もう、それ位事前に聞いてよね。いい、召喚方法は、《我に従いし者よ、来い》だけで司の場合は大丈夫よ。』

『大丈夫ってのは何だ？？』

『まあいいから、今はとりあえず早く私を呼んで。』

そう言われ俺は渋々言われた通り呪文を唱えた。

『我に従いし者よ、来い』

すると、目の前が明るくなりマリーンが来た。

「司、会いたかったわ。」

そう言っていきなり抱きついてきた。

「おわっ。」

俺はビックリしてマリーンと共に後ろに倒れた。

「待ちくたびれちゃったじゃないの。」

「ごめんごめん。どうして俺の場合はあれだけでいいんだ??」

「だって、司はまだ私としか契約してないし、もしも2体以上いた場合は名前で呼ばないと皆来る事になるのよ。」

「ああ、そんな事か。」

俺はてっきり、自分がおかしな存在なのかと勘違いした。

「ところでオリエントの子供が見つからないってどういう事??」

「俺にもわからん。どこかで迷っているのか、それとも…誰かに連れ去られたのか…。」

「とりあえず聞き込みをしましょう。」

「と言っても誰に??」

「そうねえ…、この辺りに住んでいる妖精にでも聞いてみましょうか??」

「妖精って何だ??」

「妖精はね、平たく言えば魔導の集合体の様なものね。人間が魔法を使った時の残りかすを餌にして存在しているの。後はそれから、聖霊王って言うのも居て、妖精とは違ってこの世界が創られた時から存在していて、この地を守ってるの。」

「へえ、妖精や聖霊なんかも居るんだ…。」

「司は本当に何にも知らないんだね。」

「うん、だから教えてくれたら助かるよ。
「お任せ下さい、御主人様。」
そう言ったマリーは少し嬉しそうだった。

第2章 9話『無事発見。』

そんなこんなで妖精とやらを呼んでみる事になったのですが俺には呼び方が分らない…。

と言うより見えるかどうかすらわからない…。

そう思っていると、マリーが妖精を呼ぶ儀式を始めた。

『この場に集う妖精達よ、我、メヒエル・O・マリーンの名の元に集いたまえ。』

そう言った瞬間、辺りの妖精達が集まった。

なんだか、テ○ン○ーベルみたいだな…。

そう思っていると聞きなれない単語が聞こえた。

「我らを呼んだのは貴方ですかエルフの女王よ。」

と…。

…じょーおー…じょうおー…じょうおう…

『女王！！？』

俺はつい叫んでしまった。

「はい、私です。すみません司様、私はホーリーエルフ族の女王なのです。隠していた事は誤ります。ですが、私は貴方の僕にかわりはありません。」

そう言った彼女の顔は少し悲しそうだった。

「まあその話は後にしよう。今は、オリエントの子供の事が先だ。すまないが妖精達の中でこの湖にオリエントの子供が白い花を摘みに来たのを見たものはいないか？？父親が心配して森で破壊行動を

繰り広げられていたのだが頼まれたので来てみたのだが…。」
と尋ねてみた。

「神堂家現当主、司様と御見受けいたしますが…大きくなられましたね…。」

「何故俺の名を…それに現当主と言う事も…。」

「分りますとも、貴方の魔力は他の人とは全く違いますから、雰囲気で気付きますよ。」

「司様…貴方は一体…。」

「マリー、この話も後だ。今は、とにかくオリエントの子供の件が先だ。」

「絶対ですよ。」

「分ったから…で、お前達は、オリエントの子供をこの辺りで見えないのか?？」

『見てないよ。』

『見てないなあ…。』

『見なかったよねえ??』

『見てなかったと思う…。』

『俺、森の入り口で見かけたぞ。』

と言う証人が現れた。

妖精なのだが…。

「本当か??」

『ああ、確か泣きながら、御父さん、御母さんって言いながら歩いてるのを見たぜ。』

「そうか、ありがとう。それから、ここら辺に白い花は無いのか?？」

『それでしたら、ここに。』

そう言っ、ここら辺の妖精を束ねていると思われる聖霊らしき者

が、白い花を持ってやってきた。

「すまない、近いうちに必ず、礼をしに来る。」

『別に気にせんで下さい。司様にはやらねばならない事があるはずでしょう。だから、10000年も先のこの時に居る。そうじゃ無いのかのう??』

「流石は、ここら辺の妖精を束ねるだけの事はありますね…。知っているんですか??」

『ああ…あの話は有名じゃからのう…。』

「そうですか…。」

『もし、何かあればワシらも呼んでくれ。この世界を守るのはワシらの為にもなるからのう。』

「分りました。その時は是非に。」

『ふおっふおっふおっ。それでは、気をつけるのじゃぞ。』

「はい…。行こうか、マリー。」

「はい、司様。」

そう言って僕等は、この湖から少し離れた、森の入口にやってきた。

「オリエントの子供見つからないね…。」

「そうねえ…。」

そんな事を言っていると何処からか、鳴き声が聞こえた。

『御父さん、御母さん…。』

「マリー。」

「ええ。」

俺は、マリーに呼びかけると、急いで向かった。

「君が、白い花を取りに言ったオリエントの子供だね??」

「貴方達は誰??」

「俺は、神堂司、こっちは俺の使い魔であるホーリーエルフのマリ―だ。」

「どうして僕が白い花を取りに来ている事を知っているの??」

「君の御父さんから話を聞いてね。森で暴れてたから、事情を聞いたら息子がいなくなった。って言っていて、心当たりは、湖に咲く白い花しか思い浮かばないと言っていた。なのでかわりに探しに来たんだよ。」

「そうだったんだ。ありがとう…でも…まだ、御母さんの病気にきく白い花が…。」

「それならこれだろ??」

そう言って俺は先程、聖霊からもらった白い花を取り出した。

「うん、ありがとう御兄ちゃん。」

「じゃあ御父さんも心配してたし、帰るか。」

そう言う俺は、魔法でオリエントとマリ―と俺自身も風魔法で浮びあげてそのまま一気にオリエントの父親のところまで飛んで行った。

「御父さん、これ御兄ちゃんが取ってきてくれたよ。」

「おお、これさえあれば…。何と言っていていいやら。少年よありがとう。」

「いえいえ、礼には及びません。好きでやっただけですから。」

そう言って俺はマリ―と共に学園に帰って行った。

第2章 10話『秘密…』

俺達は無事オリエントの子供を親の元に送り届け、そのまま学園に帰ろうとしたのだが、二つ問題がある事を忘れていた事を思い出した。

マリーの事だ。

「マリー。学園に行く前に君に聞かなければならない事がある。」

「何でも聞いてよ。司は私の主なんだから。」

「君は、ホーリーエルフ族の女王だとさっき聖霊が言っていたがそれは本当か?？」

「ええ、本当よ。私はまぎれもなくホーリーエルフの女王よ。でもその前にエルフ族の一人の女なのよ。私だって普通に恋をしたり使い魔になったりしたいのよ。」

「それはいいんだけど、忙しくないのか??それに何故森で襲われてたんだ??」

「女王と言っても特にする事なんて無いから別に気にしないでいいんじゃないかな??それに私はただの飾りの女王にすぎないし…。それから襲われる事は何度もあるから、何故襲われたかは分らないわ。」

「そうか…。じゃあ今から俺は学園に行くけどマリーはどうしたい??人間とエルフは仲が悪いんだろう??」

「まあねえ…。でも私はそれよりも前に司の使い魔であり僕なのよ。主の元にいない使い魔なんて聞いた事無いわよ。だから司が何と言っても貴方について行くわ。」

「そうか、分った。それから僕の話は聞かなくていいのかい??」

「そうよ、今まで忘れてたけど、どう言う事よ。神堂家の現当主って…。」

「これは話し出すと長くなるんだけど大丈夫??」

「ええ、時間はたっぷりあるから大丈夫よ。」

「じゃあ話すけど実は…」

こうして俺はマリーに洗いざらい話す事になった。

「…と言う訳なんだよ。誰にも話してないから他の人に言わないでね…。」

「そうだったんだ…。じゃあ…私の使命は責任重大ね。」

そう言ったマリーの顔は少し嬉しそうだった。

こうして俺達は学園に向かって歩を改めて進めていった。

学園シティーは大きな壁に囲まれていて警備は万全になっている。許可なく入るのはとても難しい。

でも今は俺はこの生徒なので俺は入れるがマリーはエルフ族…。使い魔と言えど中々通してはもらえないであろうと思っていた。

しかし思ったよりもすんなり通してくれた。

なんて優しい門番なのだろうか…。

そんな事を考えながら歩いていると、回りの目が気になりだした。

「やっぱりエルフって珍しいんだな。」

「人間に比べれば圧倒的にエルフは少ないからな…。」

「へえ…。エルフって使い魔になったら結婚とかってどうするんだ？

?家族とかに会い難くなったりとかしないのか??」

「エルフは基本的に結婚するけど人間とは子が出来ないの。でも人間に使役したエルフは基本的に結婚はしないって決めてるエルフが

多いのよ。でも人間の方がエルフより寿命が短いから基本的にはその後結婚する事が多いわね…。」

「へえ。でもエルフって顔が整ってるよね。」

「あら、司の方がカッコイイじゃない。私は好きよ司。」

「ありがとう。じゃあもうすぐ学園だから大人しくしててね。」

「分ったわ。」

そう言って俺達は学園に入って行った。

学園ではまだ授業中の様で皆教室で先生の話を聞いていた。

そんな中俺は学園長室を目指し歩いて行った。

学園長は案の定忙しそうにしていた。

「神堂司任務よりただいま戻りました。」

「よく帰って来たね。ところでそちらのエルフのお嬢さんは誰かな??」

「彼女はメヒエル・O・マリーンと言ってホーリーエルフ族の女王でありひよんな事から僕の使い魔になりました。」

「そうか、住む部屋の方は大丈夫だと思うが問題は授業中じゃな…。マリーンさんはどうしたいかな??」

「出来れば司様から離れたくはありません。ここで今一番信頼できるのは司様だけですから…。」

「だったら、同じクラスに入学させてしまえばいい。学費は今回の仕事の報酬から差し引かせてもらうよ。まあこれからこんな事が何度もあると思うからその都度彼女の学費はひかせてもらうからね。」

「分かりました。ありがとうございます。」

「それから、ツカサ君にはこれを渡しておこう。今回の報酬だ。」
そう言って学園長が取りだしたのは一冊の本と金貨5枚だった。

ちなみに金貨は銀貨の100枚分の値段で、銀貨1枚あればベットの
が帰る位の報酬だった。

「こんなにいいんですか??」

「なに、気にせんでいい。」

そう言った学園長の顔はとても満足そうだった、

そんなこんなでマリーは学園の生徒として学園に通う事になったの
であった。

第2章 11話『緊急事態発生…1』

俺はマリーと共に部屋に帰ろうとした。

しかしここでも一つ問題があった。

それは、シイナが存在である。

シイナはマリー家の一人娘であり、今は俺のルームメイトであり、俺の主みたいなものだ。

そんなシイナの許しも無く俺はマリーを使い魔として迎えてしまったのだ。

何か無いわけがなかった。

今から考えても仕方ないのでとりあえず部屋に帰る事にした。

部屋に帰るとシイナが心配した様な顔で見て来た。

「司御帰り…何かわかった?？」

「いや、これと言っては分らなかった…。でも、使い魔が出来た。」

「使い魔…。どんな使い魔?？」

「実はその事で少し話があつてな…。マリー入ってきてくれ。」

「はい、我が主…。」

そう言ってマリーは部屋に入ってきた。

シイナの方を見ると少し予想外の展開に驚いた様な顔をしていた。

「シイナ、紹介しよう。これが俺の使い魔である、ホーリーエルフの王女、メヒエル・O・マリーンだ。エルフが人嫌いの事をシイナは知っているな?？」

「ええ、もちろん知っていますわ。私は別にどうも思ってませんけどね。」

「それならよかった。部屋は空いてる使ってもらってもいいよな?」

「ええ、でもどうやってあの人嫌いなエルフを使い魔にしたの??」

「いや…なりゆきかな…??」

「何でそんなに曖昧なのよ。」

そう言った時の彼女の目は少し怖かった…。

訂正しよう、、、かなり怖いです…。

「ところで司様こちらの小娘は誰ですか??」

「こっ…小娘ですって…!! 私の名前はマリー・J・シイナよ。私は司の御主人様なの。だから私と司の邪魔だけはしないで頂戴ね。」
そう言った時のシイナの目はレーザーが出るかと思う位ヤバかった。

「司様は私の主である者…だから24時間ずっと一緒に居て当然ですわ。そちらこそ私と司様の邪魔をしないで下さいね…。」
そう言った時のマリーの顔も正直ヤバかった。
目からビームが出そうな程に…。

知らない間に何故か女同士の争いが始まりそうな予感がした。

その日の夜、俺は親睦を深めるためにカエイとジュリアのフランク兄妹とシンディー先輩を呼びマリーの為に親睦会を開いた。

もちろん料理は全て俺の手作り、デザートまで用意した。

メインは何かの肉をステーキにし、付け合わせでキノコと人参の様

な野菜とイモをボイルしキノコはバターで炒めて塩コショウを振っただけ、人参の様な野菜はその後バターと少量の水と砂糖で甘く煮詰め、ジャガイモはつぶして牛乳を入れてその後小さな器に入れチーズを振ってからオーブンで焼いた。

オードブルは白身魚みたいなものを香りのいいオイルと塩で味をつけて、トマトみたいなものと、キャベツの様なもので彩りを良くした。

スープは何か動物の骨で出汁をとり、そこに玉ねぎみたいなものを入れて煮込み最後にパンをカリカリに焼くクルトンを乗せた。

デザートはフルーツを潰し汁を氷魔法で凍らせたシャーベットにグレープフルーツの様なものを一片乗せた。

準備は整ったので最後に着る服が無い事に気付いたので服をどうしようか迷っていた。

「シイナ、今日のパーティーで着る服が無いのだが、一緒に買いに行かないか??」

「ええいいわよ。」

「じゃあマリーを呼んで来るからちょっと待っててくれ。」

そう言って俺はマリーを呼び3人で出かける事になった。

第2章 11話『緊急事態発生…1』（後書き）

どうも、シオンです。

最近新しい小説の構想練っててなかなかこっちの作品が浮かばなくなってきたいる作者です・・・WWWW
とりあえず、頑張ってますがね…。

明日は更新出来るか分らないけれど頑張って更新出来ればいいな…

WWWW

ではでは、愛すべき読者の皆さま。

さらばじゃWWWW

第2章 12話『緊急事態発生…2』

こうして俺達は三人で服を買いに行く事になったのだが俺の右にはシイナが左にはマリーが腕をガッチリホールドした状態である。歩けども歩けども回りの男の目が痛い事は言うまでもない。

こうして二人を見比べてみると凄く対照的だと思う。

片方は大人の色気ムンムンで誘惑して来エルフの女王様。

片方は子供っぽいあどけなさの中にツンツンしたと思えばデレる。いわゆるツンデレ…。

これは反則ではないのか？？
と思ってしまうほどである。

だが二人共スタイルはそんなにも変わらない。

胸も二人共、俺の目寸だとDとE位だと思うし、腰もくびれていてスタイルがとてもいい。

100人中95人の男性が可愛いとまず答えるだろう。

そんな女性を二人も連れている俺はまさに回りの男達の悪者だった。

「はあゝ。」

本日何回目になるかわからない溜息をついた俺は、まだかまだかと店を探していた。

「あつ、あそこはどうかかな?？」

これも本日5度目の質問…。

とりあえず入ってみる事にした。

そしてシイナは入って早々…

『ここのは安いから駄目。キチンとしたところのじゃないと私は選
びたくない。』
という始末。

そんな事を言ったらもうマリーも引くに引けない。

『御主人様は私にこの様な安物の服を着ておけば良いのだというお
つもりなのですか?？』

…と。

そんなこんなで7件目の店にてようやく決まった。

シイナは清潔感ある水色のドレス。

そしてマリーは情熱的なルージュのドレス…。

二人とも対照的であった。

でも根本的にこの二人は姉妹の様に似ていると司は思うのであった。

そんなこんなで無事にドレスを買ったのだがこれからパーティーも多いからという意味で買いに行ったのだが俺もパーティー用の服を買う事になった。

まあ臨時収入が出来たから別にこれと言って問題は無いのだがどうにもパーティーと言う雰囲気はまだまだ慣れない俺としては避けたいところであつたが二人共絶対必要と言って迫ってきたので渋々買う事にした。

パーティーは基本タキシードが原則らしいので俺はタキシードを見ていた。

タキシードは色々あつて俺は何色にしようか迷っていた。

（無難なところで黒にしようかなあ…でも白もいいなあ…あつ、この色珍しくていいなあ…）

などと考えていたらシイナが赤いタキシードを持ってきた。

「司は赤が多いから赤の方がいいよ。」

そう言ってシイナは渡して来た。

正直赤いタキシードってどうかと思つたのだがとりあえず着てみる事にした。

出てくると二人共少し驚いた顔で固まって顔を赤く染めていた。

「似合ってるかな?？」

…。

反応なし…。

「やっぱりこれはやめよう。」

そう言っただけを脱ぎ捨てようとした時。

『駄目、もう司様はその服に決定なの。』

と言うマリーの声と。

『それじゃなかったら一生私の玩具にしてあげるわ。』

と言うシイナの声により俺は強制的にこの赤いタキシードに決定した。

正直複雑であった。

そんなこんなで無事に服を調達した三人は一度部屋に戻り準備に取り掛かった。

何故友達同士のパーティーでここまで盛大にするのかと言うとそれはもちろん上流階級の方々が集うからである。

まず、俺の主であるシイナに始まり、フランク兄妹も上流階級、そして使い魔であるマリーはエルフの女王様であるし、シンディー先輩に至っては第三王女である…。

正直俺なんか出るところじゃないのに、むしろ俺が幹事のパーティーに来るのもどうかと思うのだな…。

まあ今更なので良しとしよう。

そんなこんなでパーティーの準備が整い皆段々と集まって来たようだった。

まず最初に来たのはシンデラー先輩だった。

『司君、今日はパーティーに誘って下さりありがとう。』
と司に御辞儀をした。

先輩のドレスは純白…白…白…。
ウェディングドレスですか??と聞いてしまいそうだった。

そして、フランク兄のカエイは黒のタキシード、でも微妙に似合っていないかった…。

フランク妹のジュリアはオレンジのドレスだった。
これはこれでいい、妹キャラらしく元気をアピールしているようだった。

そんなこんなで皆集まり地獄のパーティーの時間がやってきた…。

この後、まさかあんな悲惨な事が起こるなんてこの時は誰も予想で
きなかった…。

ある一人を除いて…。

第2章 12話『緊急事態発生…2』（後書き）

どうもシオンです。

今回は凄い思わせ振りの終わり方ですが次回何が起こるのやら…。

作者にも分りません：w w w

駄目な作者で申し訳ありません。

つついりレー小説の癖で、次回書く事を考えないで書いていしま
う…。

俺の悪い癖です。

まあ明日は明日の風が吹く…で、自由奔放にやっていきたいと思
います。

シオンでした。

第2章 13話『緊急事態発生…3』

そんなこんなで皆集まったので俺は料理とグラスと飲み物を準備してテーブルの前までやってきた。

何のためにかって??

そんなの最初の挨拶をするからに決まっている。

と言う事で俺は最初の挨拶をする事になった。

『皆様、本日は俺の使い魔、マリィの為に集まってくれてありがとうございます。料理は全て俺の手作りだから足りなかったら言ってくれ。ではマリィ一言挨拶を。』

そう言ってマリィを立たせた。

『皆様、私の名前はメヒエル・O・マリィンです。私は見ての通りホーリーエルフでありその女王です。ですが私は司様の僕ですので気軽に接して下さい。まだまだ若輩者ですがどうぞよろしくお願いします。』

『では皆様、御立ち下さい。それでは、マリィとの新しい友人に…乾杯!!』

こうしてパーティーは始まった。

悪夢のパーティーが…。

この時司は思いもしていなかった。

自分の身に起こる災難に…。

最初の30分は皆楽しくお喋りしながら食事をしていた。

しかし、誰かがブドウジュースの中にワインを忍ばせていた事には気付かなかった…。

結果、司以外は全員酔っていた。

その結果だが…右腕にはシイナ、左腕にはマリー、後ろから抱き締める形で居るのがシンディー先輩、そして膝の上にはジュリアが座った状況だった。

何…このカオス??

「司は私のなんだからね。誰にも渡さないんだから。」
そう言っているのは右腕に居るシイナ…。

「私は司様に身も心も体も全て捧げたんですから貴方達には渡さないわよ。」

そう言っているのは、左腕にくっついて離れないマリー…。

「私なんてこの前司様に頼りになるねって言われたのよ。この役立たず達が私の司様に触らないで。」
と言っているのは俺を後ろから抱き締めているシンディー先輩…。

「私は司君になら何でもしてあげるんだから。ねえ、ツカサ君、私を食・べ・て。」
そう言いながら膝の上に座っているのがジュリア…。

正直しんどい…。

俺ってどれだけフラグ立てて生きて来たんだろう…。

とつくづく感じた。

しかし、どうしよう…。

この酔っぱらい共…。

そんな事を考えながら俺はカエイに助けを求める様にすがった目で見ようとしてもカエイの姿は見当たらなかった。

何故だろうと思ったら、奴は寝ていた。

どんだけ酒に弱い奴らだよ…。

と思いながら俺はとりあえずこの状況をどうにかしようと考えた。

しかし考えていても、何も思い浮かばない俺はやけ酒をして飲みだすのだった。

そんなこんなで地獄??のパーティーは幕を閉じたのだった。

第2章 13話『緊急事態発生…3』（後書き）

どうも、グダグダ感満載の小説です…。

ハーレム小説と言っても過言ではない様なものになりつつあるこの小説…。

次回はもっともっと過激になりそうな予感…W W W
エロスを出した方がいいのかなあ…。

切に思います。

では、またの御来訪をお待ちしております。
シオンでした。

第2章 14話『緊急事態発生…4』

翌朝、俺は体全体が重く頭が痛い状態で目をなんとなく覚ました。

しかし、全くもって動けない。

（はっ、まさか金縛りか!!??）

そんな事を思っていたら、全くもって違った。

ああ、いい様に期待を裏切ってくれた。

俺は何時もの様にベットで寝ていた。

ある状態を除いてだが…。

俺の上にはシンディー先輩が、抱きしめてたまま寝ていて、右腕にはシイナ、左腕にはマリー、足元には器用に丸くなった状態でジュリアが寝ていた。

そりゃ動けないよね…。

しかしそれからが修羅場だった…。

そう、この状況をどうこの4人に言いつつ起こすかという問題だ。
ハッキリ言って地獄以外の何物でもない。

正直、ここまでの修羅場はくぐった事がないのでどうなるかすら分らない。

俺は、考えた末に脱出して、尚且つ皆を何処かに運ぶ方法を考えた。

頭さえ回り出せば何も恐れるものはない。

俺様お得意の風魔法で一片に運べば問題解決するではないか。

そう言う考えに至った俺はなるべく慎重に風魔法で彼女達を浮かび上がらせようとした。

しかし、一向に浮かび上がらない。

何故かは明白だ。

浮び上げようとする彼女達が俺にしがみ付き、運ぶのに俺も一緒に動く事になるからだ。

仕方なく俺は自力で脱出する方法をとる事にした。

なるべくそっと、シイナとマリーの手をどけて、シンディー先輩を御姫様抱っこ（笑）して起こさない様に移動させてから、残りの三人も別々の部屋に寝かせた。

（ふう〜。隠蔽工作終了。あっせった〜。）

そう思いながら、緊急事態が続いた日々を送ったのだった。

しかし、彼女達はその時の記憶を覚えているので起きた時に何で隣に居なかったのかを怒られたのは言うまでもない：w w w

第2章 14話『緊急事態発生…4』（後書き）

どうも、シオンです。

今回は、マリーンの転入です。

さてさて、次はどんな事になるのやら…。

次回も楽しみですね。

ではでは、皆を愛する作者でした。

明日は、違う作品が上がってるかもしれないかもしれない…
W
W
W

第2章 15話『転人生は美女??』

俺達は学園に向かっている。

しかし、回りは何故か女ばかり…。

（なんだこの状況は??）

過去、これまでモテタ事のない俺は正直焦っていた。

右にはシイナとジュリア、左にはマリーとシンディーと言う周りから見れば羨む様な状況で俺は登校している。

しかも、男子からの目は殺気に満ちており、女性の目も少し複雑だった。

（早く学校に行って寝たい…。）

そう思っていると、学校に着いた。

「じゃあ皆は先に行っててね。俺はマリーと職員室に行かなきゃならねえから。」

そう言う俺はマリーの手を取り、職員室に急いで向かった。

正直、登校するだけでここまで目立つとは思っていなかった俺はどうしていいか分らず、ずっとマリーと手を繋いだまま職員室に向かった。

そこで俺は担当の先生にマリーを預けて早々に退散した。

そして授業が始まった。

『では、今日は転校生を紹介する。じゃあ入って来い。』

そんなニーナ先生の声で入ってきたのはマリーだった。

先生を見ると何やら楽しそうにニヤニヤと俺の方を向いて笑っていた。

『では紹介する。ホーリーエルフ族のメヒエル・O・マリーンだ。何故、エルフがと思ったかもしれないがこいつは司の使い魔でもある。皆仲良くしてやってくれ。じゃあ、マリーン自己紹介。』
そう言われマリーは皆の方を向き、自己紹介を始めた。

「メヒエル・O・マリーンです。マリーンと呼んで下さい。でも、マリーなんて呼ばせないんだから。」

そう言う俺の方を向いてニコッと笑った。

正直可愛い…。

多分この教室の男子のハートを全て掴んだに違いない。

そして俺は悪者役なのだろう…。

そんな風に思っていたら、シイナのストーカーが俺の方を向いて嬉しそうにしていた。

多分奴の頭の中は（まだ俺にもチャンスが）とか思っているのだろう。

正直ないから、かわいそうだけど…。

そんな感じで、ホームルームが始まった。

ホームルームの内容は、どうしてマリーが俺の使い魔になったのかと言う話題と、エルフが人間をどう見ているのかと言う事と、後ごく一部の変態がスリーサイズを聞いていた。

正直どうでもいいので俺は寝ようとしていたが、ニーナ先生に睨まれたので真面目にホームルームを受けた。

そして今日も一日が始まって行くのだった。

そして次の休み時間、地獄は訪れた。

そう、皆からの質問攻め。

誰が好きなのか??とか、マリーと寝たのか??とか、正直どうでもいい様な事ばかりだったので俺は逃げた。

しかし、皆も必死で追いかけてくる。

そこで俺は途中の道に俺様スペシャルの結界（雷魔法属性付き）を配置してなんとか逃げきろうとしたが、途中で誰かに捕まってしまった。

しかし、そいつは俺を掴みそのまま、近くの部屋に俺を連れて入った。

そして、しばらくすると、皆の足音がしたがしかし通り過ぎて行った。

どうやら匿ってくれた様だ。

誰だろうと思い見てみると、シンディー先輩だった。

「どうやら行ったみたいね?? 大丈夫だった??」

そう言って彼女は微笑んだ。

そんな彼女の微笑みに俺は一瞬ドキッとしてしまった。

「あっ、ああ、ありがとう先輩、助かったよ。」
そう言って俺も笑い返した。

「でも、どうして追われてたの??」

「ああ、マリーが俺のクラスに転校してきたからだ。」

「司君も大変ね。困ったらここに来ればいいわよ。結構穴場なんだから。」

「へえ、でここは何の部屋なんだ?？」

「王家御用達の開かずの間よ。ちなみに授業をサボる時にはもってこいね。」

そう言ってシンディー先輩は悪戯をする小悪魔の様に微笑んだ。

正直、シンディー先輩が身近に感じて嬉しかった。

そう思いながら俺は、先輩と一緒に次の時間まで時間をつぶしたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1394j/>

神堂司～世界を救う紅い瞳～（仮）

2010年10月9日23時24分発行